

31

7x

Ⓜ

志廣重恭著

北征錄
付
北遊草

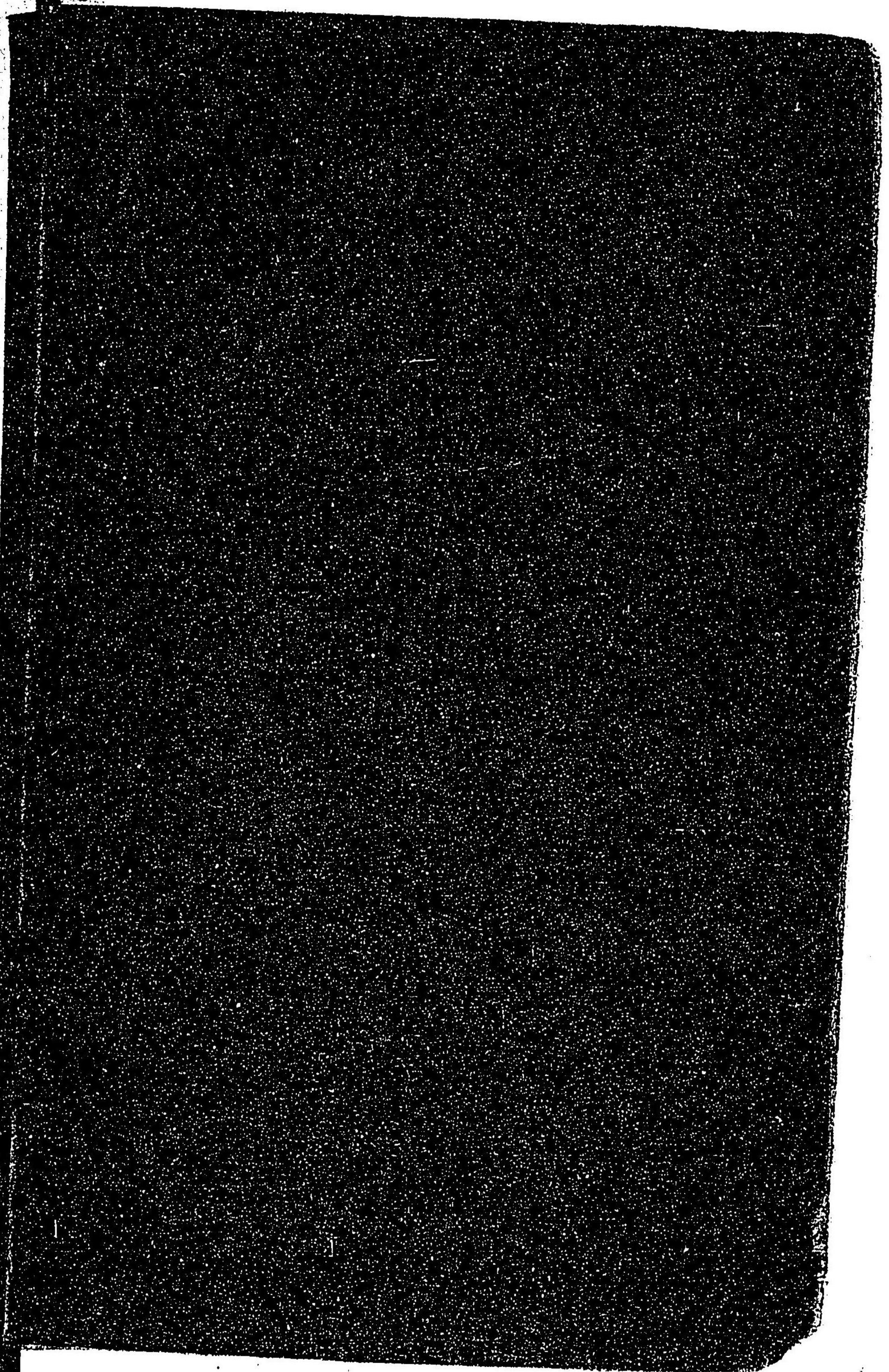
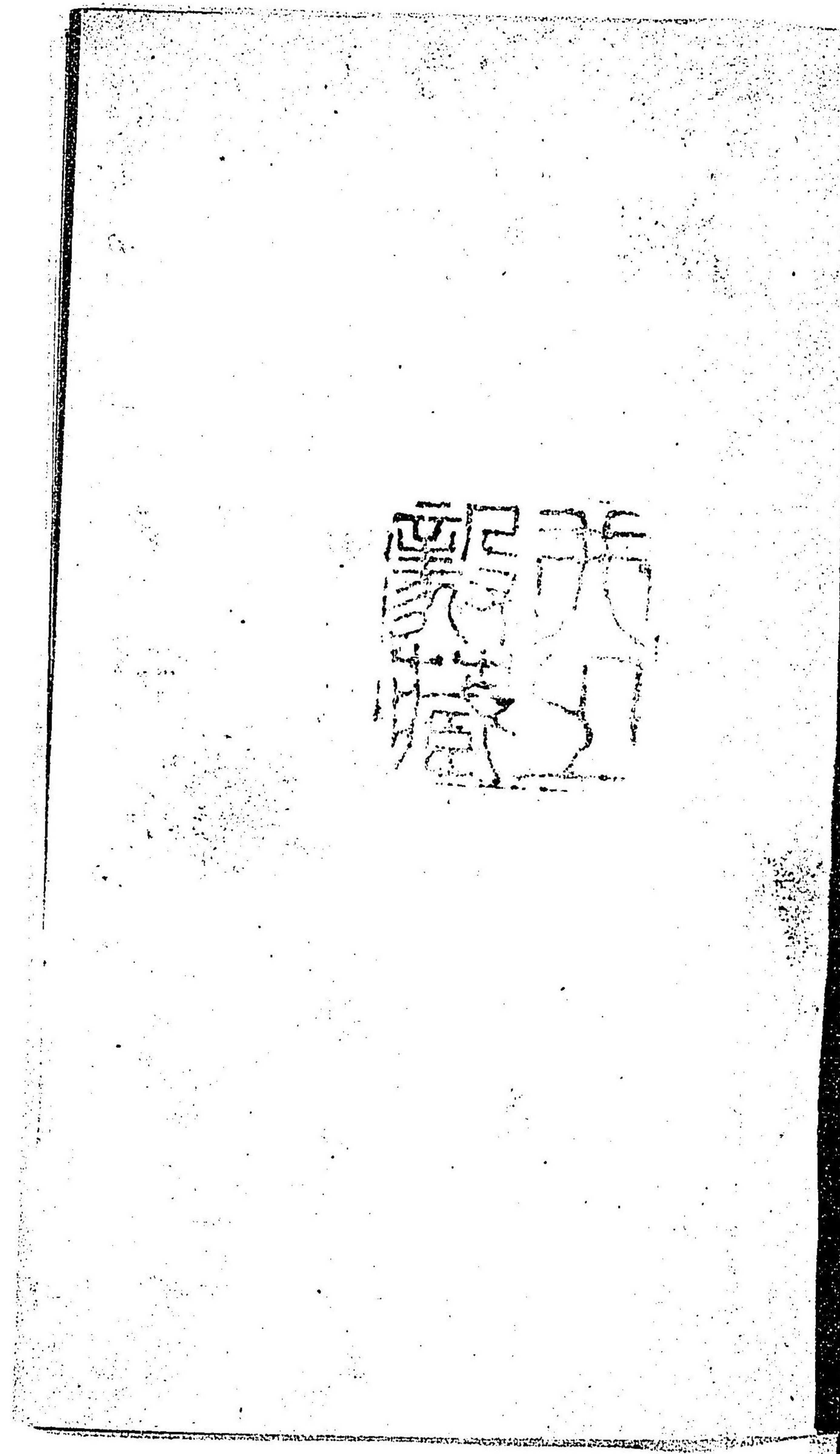
東京 青木堂山堂出版

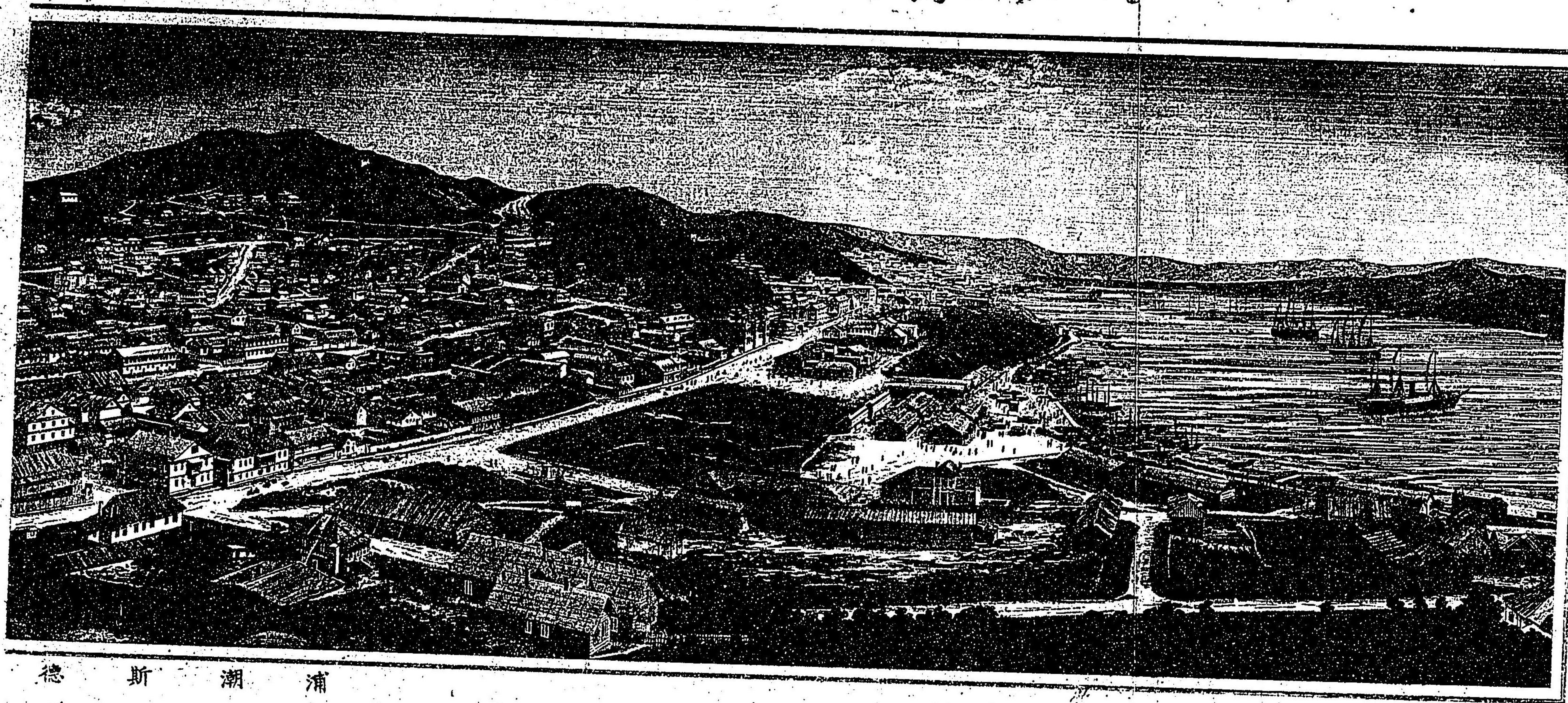
三十七卷十月十五
新凌浦港部

未廣宣恭著

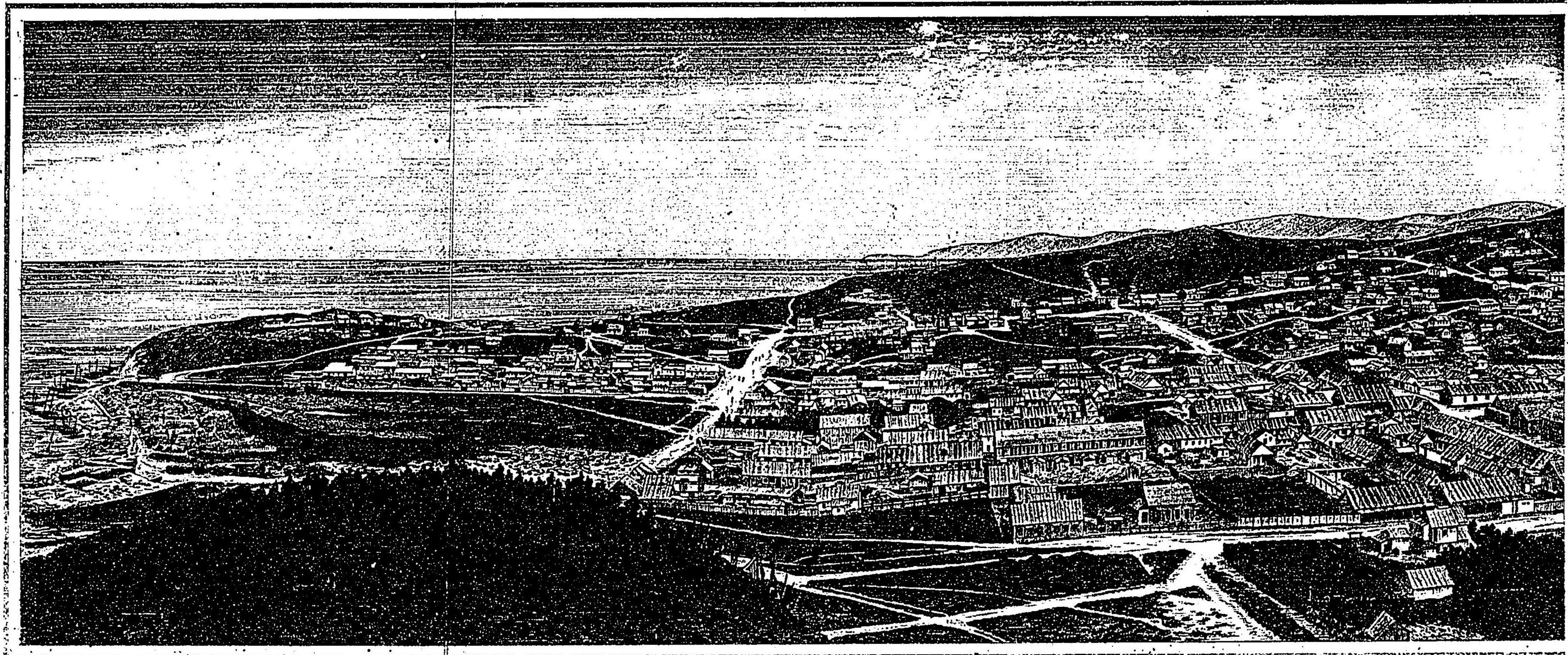
心証
附
遺字

東京 青木嵩山堂出版





德 斯 潮 浦



港之全景

北征録

余久く東西漫遊の志あり而して果さず今年炎暑殊に酷烈なり因て箱根を避けんとせしが思へらく竹林松徑に涼を納

るは平凡なり若かず長風萬里の遊を試みんにはと郵船會社汽船東京丸十八日を以て神戸を發し浦潮港に赴くを聞き之に乗るに決す而し暑中汽車の旅は不愉快なり因つて横濱より海路を取らんとし午前八時半車を馳せて新橋に到る

余を停車場に待つもの數十名九時發す中川村松森本及ひ兒重雄と同車し横濱に着し歩いて郵船會社に至る暑氣堪ゆへからず支店長谷井保氏一同を樓上に迎へ小汽船を以て本船山城丸に送り事務員と俱に洋酒を酌み余の遠征を祝す已にして一同皆別を告げて去り正午發船す海上風あり少しも炎

暑を覺ゆず然れども客室に入れば火氣炎々として流汗衣を
 濕す波濤極めて平かなり夜に入るまで客室に在て蘇詩を讀
 む此行詩を以て各處の風景を寫さんとし行理中に韓蘇二家
 の集を携ふ知らず果して幾首を賦し得べきや否や

十五日 天晴れ風靜かなり味爽起きて甲板を歩行す船勢紀
 の間にあり十二時過ぎ波の御崎を踰ゆ海風熱を含み甲板上
 にあつて釜中に坐るが如し先年洋行の歸路印度洋を經過せ
 し時を思起せり午後六時神戸に入る神戸日報社員數名小蒸
 汽に乗つて來り迎ふ波戸塲に上りて社主牧野君に逢ひ直に
 海岸通の常盤舎に投ず陸上暑氣堪ゆべからず愈々船行の便
 宜なりしを知る牧野氏に誘はれ日報社員數名と車を馳せて
 諏訪山東常盤に赴き鑛泉に一浴して熱を洗ひ樓上に飲ひ紅

神戸

租杯を侑め興情大に熱す醉後席を辭して常盤舎に歸らんと
 す諸氏曰く山中尙は熱す市街の逆旅に歸れば眠に就く能は
 ざるべしと遂に宿す

十六日 樓上風なし炎熱燬が如し余は布引瀧を一見せんと
 す牧野河合淺堀の三子東道となり車輪炎塵を蹴りて布引に
 至り車を下つて坂路を攀づ流汗滴々衣を濕す忽ち白布の石
 壁に掛るを見る即ち女瀧なり傍に近けば冷氣漸然として肌
 を犯す橋を渡り更に上る坂路愈よ險絶なり一小嶺を踰ゆれ
 ば飛瀑前山に懸り滔々聲あり之を男瀧とす嶺腹の一小樓に
 憩ふ前は飛瀑に對し後は懸崖に臨み松間海色青く仰げば青
 山屏風の如く頭山に墜落し來らんとし嵐氣清爽にして人間
 に炎暑あるを知らず日中此の樓に止まり晚涼に乗じて歸ら

んとしたるに鶏卵の外は食ふもの無きに因り已むを得ず山を下りて布引に出で、車に入り馳て諏訪山に歸る大阪朝日新聞社より村山龍平君今夜東京に歸らんとす急に面會したき由を電報す因て常盤舎に至りて結束し後六時四十五分の汽車に乗る村山君停車場にあつて余を迎へ自由亭に至れば上野理一君先づ在り與に會食し通信の事を委託せらる九時停車場に至り村山君の一行を送り遂に洗心館に宿す河上火影星の如く遊舫往來し時々砲聲響き群星乱れ火龍躍る然れども樓上風無く深更に至るまで涼氣を覺へず

四

神戸の演説會

る爲めなり三宮停車場より馳せて常盤舎に赴き行李を整理す來訪するもの其の數を知らず七時過ぎ神港俱樂部に赴く此の俱樂部は實業者より成立し即今會員二百餘名に上ばれりと云ふ席に列なるもの百六七十名なるべし余は我が國の前途を想像し蒲潮及び朝鮮の事情を實驗する必要を感せしことより説起し政事上商業上に豫め大設計を定めざるべからざるを論じ遂に東方協會の趣意目的を始め報告書の利益を世間に與ふることを擧げ殆んど一時間に渉るの演説を爲せり聞く聽衆中會員たらんとするもの少なからずと喜ぶべきなり俱樂部員數名神戸日報社員と謀り余のために送別會を手合樓に開く宴酬にして郵船會社の小蒸氣船余を波戸場に待つとの報知あり因て數名の送客と馳せて常盤舎に歸り

六
直に波戸場に赴く牧野武岡の諸子此の處より辞し去り河合郷石川の諸子は本船に至つて別を告ぐ東京丸は船體大にして頗る清潔なり一月一回づゝ神戸蒲潮の間を往復す午前四時を以て當港を出發せんとす事務長伊藤氏に就て蒲潮の形狀を開き大に益する所あり二時過ぎ客室に入る暑氣甚しく睡に就く能はず屢々起ちて甲板を往來す已にして錨を巻くの聲あり

十八日 睡覺れば船播磨洋にあり紅日横に船窓を射り暑氣甚し已にして海風漸然として熱を拂ふ工學士日本土木會社員笠井君工業視察の爲め蒲鹽に遊はんとし神戸より乗船す郵船會社の柳君も亦釜山に趣かんとす君は久しく蒲潮に在り又朝鮮諸港の事情に通ず船中の談話寂寞ならず夜に入り

門司

海氣愈よ清涼なり嚮きに神戸を發するや牧野君家釀を贈らる試みに一瓶を開き笠井君と對酌す烈にして甘し眞に美酒なり大酔して枕に就く

十九日 味爽起て甲板に出づれば船方に檀浦を過ぎて門司港に入る再び睡に就く余を呼覺す者あり睡眠を措して之を見れば西河通徹君なり君は門司新聞の主筆となり三四月以前より此地にあり起て面を洗ひ甲板に出で、談話す此日清涼東京を發する以來曾て無き所なり西河君今朝小倉に趣く用事あるを以て余が歸路の再會を約して歸去る門司は下關と相對して海港をなし内海より支那朝鮮を始め其他の諸港に趣くには必ず經過せざる可からざる要衝なり且つ豊前筑前の石炭は近來非常に海外に輸出し而して今や此地は九州

門司の景況

鐵道の起點となり且つ特別輸出港となりしを以て漸次に繁盛を増加するの勢あり然るに目下に横はる障害少なからず第一に下關の税關は神戸に屬し門司は長崎に屬し其管轄の異なるを以て百事不便利なり行政區も同様にて下關は山口縣門司は福岡縣なり故に水上警察も兩途に出で泊碇の船中に流行病あるときの如き往々雙方の警察にて爭論を生ずるのみならず同じ港内に於て二つの病院を要するに至る事情此の如くなるを以て門司と下關の人民は互に反目して相争ふの勢あり港内全體に關する事業は一も行はれずと同船の人は語れり此港は稍や狹隘にして同時に多くの大船を碇泊すべからざるにもせよ實に西海の咽喉に當るを以て支那朝鮮及び日本海に於る貿易の盛大となるに従ひ出入の船舶も

愈よ増加するに相違なし然れば地勢の許す限りは十分に改良を加へて一の良港となさざる可からず棧橋を造りて荷物の揚卸を便利にし以て船舶の交代を迅速にするが如き最も目下の大急務なり此等の事業を成さんとすれば一帶の水を隔つる兩港を以て一つの行政區の下に置き之を一の市となし互に協力して各種の改良を謀らしむるに若くは無し第二に門司は新開地にて日に人口の増加する趨勢あれども如何せん其土地は尽く築港會社の爲めに占領せられ丘上溪間にても他日人家となるべき場所は一坪の賣價十五圓以上なるを以て移住民は非常の困難を感じ爲めに港内の發達を妨害する少なからずと云ふ十時發船す波濤極めて穩かなり門司港より第十八銀行頭取國會議員松田君乘船す又浦潮にあつ

て雜貨店を開ける小林氏も此船にあり同地の景況を談ずる頗る詳細なり一の東道主人を得たるを以て笠井君及び余の喜知るべきなり薄暮壹岐と平戸の間を過く漁火海上を蔽ひ萬点星の如し漁業の盛んなる想ふべし十二時長崎港に達す廿日 午前八時笠井君と俱に解船に乗つて上陸し元町の緑屋に投宿す炎暑酷烈なり鎮西日報社員來訪す午後渡邊修氏來る氏は余と同郷にして現に當地の郵便電信局長たり前年元山の領事となり曾て浦潮へ一遊せり氏の案内により丸山の上頭にある寶亭に遊ぶ地勢高く長崎市を眼下に望み景色佳絶なり日没後復た暑氣を覺へず大醉車を馳せて寓に歸る海門艦長柴山大佐同樓に在り來話す氏は前年余と同く春日潜巷翁の門にあり麥酒を傾け酒氣愈よ發し遂に暈倒す

二十一日 暑氣堪ゆべからず清涼の地に就き日を消せんとし樓婢に問ふ曰く諏訪山の貸席に若く無しと乃ち笠井君と俱に車に上り馳て市街を過ぐれば一小山あり樹色鬱蒼たり即ち公園なり歩いて上れば中腹に家あり松の家門表を掲ぐ構造頗る雅致あり蓋し前に知事たりし日下氏の別荘にして今は一孀婦の所有となり客の來遊に供す碧樹屋を蔽ひ長崎市街其間に隱見す清風颯然として復た炎暑を知らず笠井君と對酌して午醉し薄暮復た酒を命ず此樓にては割烹をなさず料理は山下の酒樓なる富貴樓より送致す酒酣にして絃妓二名來る一老一少俱に劣品なり長崎の俚謠を歌ふ我々は一も其意を解せず一句毎に解釋をなさしめ始めて左の如き意味なるを知る戯に録して讀者の一噓に供す

長崎の俚語

十二

オンダイヤ(私はイヤ)ンケイシマスナ(其様事仕ますな)バ
ケイシトル(馬鹿にシトル)ドウイウコンナンナ(どんなに貴
君は嫌らしい人だナ)ヨメヤシカ(悪い人)モンチャロカ(ダカ)
ホウカイオンドガアオモチヤ(ホンニ私の情夫は)ホウカニ
アル(外にある)ホウカニアル

絃罷み妓去る夜已に更るを以て遂に宿す暑氣甚しく睡に就
く能はず主人曰く今夜の如きは山中に於て曾て無き所なり
と

二十三日 午前諏訪山より旅店に歸り渡邊君を郵便電信局
に松田君を第十八銀行に訪ふ烈日天に當り暑氣酷烈なり山
口五郎八君來訪す君は十餘年の久き支那にあり辨髪にして
清服す知ざる者誤て支那人とす聞く所によれば長崎港は近

長崎港を論ず

來次第に衰微に傾き殊に門司港の特別港となりしより非常
の影響を受くる有様あり且つ往時は年々二三萬圓の金を費
やして港内を浚疏せしが近來は全く其の事なきにより大船
は海岸に近い碇泊すべからず世の論者中長崎は地勢の不
便利なるを以て支那に對する他の海港を選ふべきことを主
張するものあれども余は之に同意せず實際に多少の不便あ
るにもせよ三百年來の開港場にして四萬三千有餘の人口を
有し居留地あり倉庫あり造船處あり銀行諸會社あり之を棄
て青蘆白砂の土地に於て新に開港場を造り出たさんとするは
策の得たるものに非ず目下支那に對する貿易港は長崎なら
ざるべからず余は當局者の早く其の目的を定め九州鐵道を
長崎に貫通し港内百般の改良を加へ西海に於る外國貿易の

十三

要衝となさんことを望む東京丸の發する午後二時にあり午飯を喫し旅店を出んとして八時に延びしと聞く旅店夕日を受け居るべからず遂に馳せて向陽樓に趣く長崎の全景を望み兼て海山の勝あり唧筒を以て上水を庭上に灑ぎ烈日の下に雨を飛し帳に暑氣の消するを覺ふ日没前車を馳せて歸り直ちに郵便電信局に趣く渡邊君二人を海岸に送り郵便を送致するボートに乗らしむ八時發船して朝鮮に向ふ

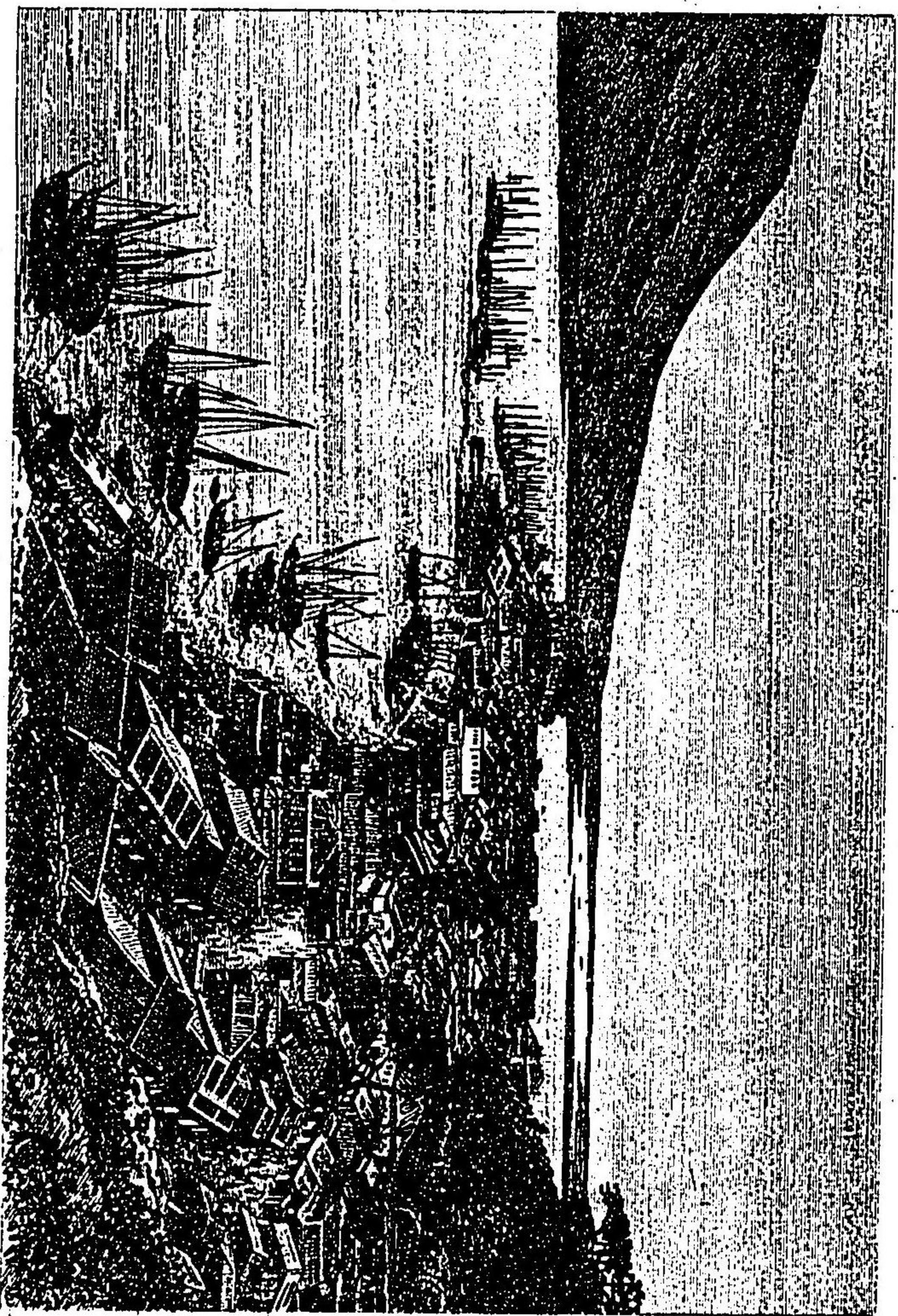
釜山に入る

八月二十三日 曉雲の間に對馬を望む海上極めて陰かなり午前十一時釜山港に入る右に半島突出し左に絶影島あり入口極めて狭く波上に峭巖三つ相列んで立つ興利島の名あり英人は之をチャンチルフラックと云ふ港の内外に於て小艇の出沒するを見る漁夫は多くは日本人なり樹木鬱蒼たる小

釜山の景況

山の下に許多の人家あり白壁蒼波相映す即ち日本の留居地なり税關波戸場は居留地の前に在り汽船大小二艘碇泊す皆な日章の國旗を掲ぐ一は郵船會社の臨時船にて此港より米穀を積んで元山に趣かんとし一は神戸と釜山の間定期航海をなす商船會社の汽船なり波戸場の内には三檣又は一檣の商船漁船幾十艘なるを知らず皆な九州又は中國より來れる者なり笠井君と解船に乗つて上陸し日本居留地の旅店大池に投宿す日本居留地は萬松鬱々たる龍頭山を繞り三面海に對し自ら一郭を成し目下人口五百二十五人ありと云ふ領事館あり警察署あり郵便電信局あり第一銀行支店あり總代理所あり商法會議所あり日本郵船會社あり水産會社あり小學校あり共立病院あり料理屋の大なるものは曰く京坂亭曰

十六
く西洋亭而して料理屋には多くの藝妓ありと云ふ市街清潔
にして家屋の構造市店の有様まで毫も内地に異ならず當港
は少數の支那人を除くの外は概ね日本人なり昨年の輸入一
百六拾七万五千八百四拾八円同く輸出二百六万八千百六円
なり而して日本よりの輸入一百四十九万三千百六拾九円其
の重なるものは生金巾、寒冷紗、絹織物、日本綿布、金属製品、銅、
鋳細、石油、食鹽、木材等なり同く日本への輸出一百七十五万三
千九百九拾七円其の重なるものは米、大豆、綿布、大麥、牛皮、海草
等なり支那人は四万三千三百六十九円を輸入し二万九千三
百五拾八円を輸入するに過ぎず聞く我が居留地は後來人口
の増加に従ふて狹隘を感ずる恐れ有り幸に龍頭山の東に
高阜あり海に臨んで屹立し周圍半里なるべし是れまで我國



龍頭山日本町

露國の計畫

の墓地あり之を我が居留地に組み入る、計畫中露國より官吏を派遣し此の墓地の前に當る海岸四百メートル及び其東に當る英國の借地を越へ更に百五十メートルを測量し夫れれ標本を建てたり蓋し日本居留地に接し英國居留地を包み海岸より深く陸地に入り廣漠たる土地を占有せんとするもの、如し現今釜山港には一人も露國人なし然るに此の計畫あり其の進んで大に力を朝鮮に展べんとする志あるを見るべし我が領事は此事を聞き急に高阜上に日本墓地の標本を建て漢城にある公使に電傳して急に談判を決することを掛合ひたり其後開けは此の土地は愈よ我國人の手に落ちしと又絶影島は我が居留地の前に屹立し呼んで奪んとす土地太だ險峻ならずして開墾に適し最も形勝の土地なり且つ居留

絶影島

地には一の上水を引けども其分量多からず然るに島内には處々に溪流あるを以て軍艦及び漁船は供給を此島に仰けり現に今秋の如き旱魃の爲め居留地の用水涸れしにより已むを得ず家々の飲料水までも此島より輸送せり前年我政府は朝鮮政府に請ひ海岸の一部分を借受け海軍の石炭倉庫となせしが夫の濟州島漁業一件よりして此の島内に於て許多の土地を得て魚干場となさんことを要求中なり然るに露國は前年より此島に注目し頻りに借受けの談判を開き米國も亦同様の請求ありと云ふ此の一事は我國に取て重要な事件なれば決して輕々看過すべからざるなり村上唯吉氏は朝鮮語を善くし前年漢城及び仁川等に滯留せり即今此地にあり來訪して一日の東道主人たるを約す我々は最初東萊府に遊ば

朝鮮の家屋

んとせしに漁船出發の期に後る、恐あるを以て果さず三人歩して日本居留地を出で草梁に至る即ち清國居留地なり人家二三十に過ぎず孰れも狭少にして商賣も太だ盛大ならざるもの、如し獨り理事府支那の領事館なり其間に屹立し壯大目を驚かす道路に丘阜多く加ふるに紅日天に當り西風炎塵を巻き暑氣堪ゆべからず馬三四を僦る此の近傍の馬は皆短小にして大さ牛犢に異ならず性も亦極めて柔和なり一匹毎に土人綱を曳て行く舊館を過ぐ即ち以前居留地の在りし處なり今は朝鮮人の聚落たり余は是れまで朝鮮より歸りしもの、談を聞くに其の家屋の汚穢なる言語に絶することを見説かざるはなし今實地に就て之を視るに誠に狭小にして且汚穢なるに相違なきも曾て想像せしが如きの甚しきに至ら

す孰れも高さ五六尺にして土と石とを以て壁となし蔽ふに
 茅又は藁を以てし一室の廣さ凡る二疊敷ばかりなり稍や大
 なる家には三四室を有し其の小さものは一室に過ぎずして
 食器家具類まで其の内に積堆す之を人家と云はんよりは寧
 ろ豚小屋と見做すべし公平に之を評せば其の村落は我が邦
 の邊鄙にある穢多村に彷彿たり蓋し朝鮮は寒國なるを以て
 孰れの家にては牀下を掘りて煖爐を造り寒中には火氣を通
 じて温氣を取るの習慣あるを以て自然に家屋構造の狭少な
 るを致たすと云ふ然れども其の衣服に至りては家屋と同一
 の論に非ず余は嚮き海岸に上陸し其處に集る人足を視るに
 孰れも白色の衣裳を着くし汚穢なるもの極めて少なし居留
 地を散歩し及び市店に出入するものは孰れも立派なる黒笠

朝鮮人の衣



朝鮮人の衣

を戴き布又は寒冷紗にて製したる衣と袴を着くをし唐鞋踏
み長さ烟管を手にせり其の服装極めて古雅にして且つ清潔
なり故に余は思へらく是れ必ず中等以上の紳士又は商人な
らんと然るに今村落に入つて見れば此の先生達は汚穢千万
なる家屋の中に坐し黒笠を着せしまゝ、二三人も相ひ列ひス
ハハ、烟草を吸ひ乍ら偃臥するものあり余は是に於て其衣
服と家屋の相一致せざるを驚かざるを得ず且つ余の一見せ
し處によれば目下炎暑酷烈の際なれども勞役者すら麻の窄
袖衣を纏ひ赤條々のもの太だ少く其の清潔なる我國人は却
て一步を譲らざる可からず行く一里ばかりにして一の城門
あり四方に石壁を繞らし其の上に土牆あり城内周圍廿町ば
かりなるべし即ち釜山鎮なり汚穢なる民家の間に釜戸所戸

長役場、拱辰館、大賓を迎ふ所、教練所、別砲軍官廳等あり、概ね壤
 圯す、南門を出づれば正面に大なる門あり、海左主鎮衛門の額
 を掲ぐ、門前を過ぎ左折すれば小山あり、樹木鬱蒼たり、此處に
 も亦石壁土牆を繞らす之に登れば其の上に城壘の遺址あり、
 石壁半ば崩る、頂上平坦にして四方一丁ばかりなるべし、即ち
 釜山城にして小西行長の一擧して陥れしもの、即ち是れなり、
 中央に一大碑あり、磨滅して一字なし、其側に又一碑あり、小屋
 を建て、之を護す、是れ亦字多く剝落し讀むべからざるもの
 十の八九蓋し一は釜山子城銘一は皇朝經理大中丞萬公碑、閣
 重修記なり、其の文を木に刻して壁上に掲ぐ、文長きを以て録
 せず、山を下つて歸路に就けば馬夫拱辰館にあつて我々を待
 つ、咽乾くを以て門前にある婦人と呼んで冷水を求め、韓錢三

釜山城

韓錢の不便
利

文を與へ之を謝す固く辭して受けず、曰く水に代ゆるに錢を
 以てすることは朝鮮に於て無き處なりと、人氣の質樸なる想ふ
 べし、朝鮮に來つて最も不便を感じするは韓錢なり、居留地
 内は日本の貨幣にて差支へなければども、地方に出つれば韓錢
 を用意せざるべからず、我が二十五円に當る韓錢運ふには一
 匹の馬を汗すべし、頃日我國人釜山より陸路京城に趣かんと
 す、途中旅館の不便なるを以て蚊帳、蒲團、蠟燭、食器、食品、とを
 運ふ爲め、許多の馬を要し、更に三匹の馬を借入れ、小遣及宿拂
 に當る韓錢を背負はする用意をなせり、賄賂の流行は朝鮮の
 名物なるか、官吏に鼻藥を贈る者は之を數匹の馬に載せて玄
 關に運入れざるべからずと云ふ亦一笑すべきなり、再び騎し
 日没前居留地に歸る續々來客あり、大坂毎日新聞社員平尾要

作氏頃日漢城より陸路を取り釜山に來れり朝鮮内地陸路困難の模様を説く太だ詳かなり此の夜室田領事を訪ひ十二時前一小酌して本船に歸る杉山工學士前便に此の地に來つて諸方を檢視し我々と同く浦潮に趣き深く内地に入らんとす又一の同遊者を得たるは喜ふべきなり

二十四日 午前四時發錨す一睡して甲板に出づれば紅日方に海に出で海風冷氣を帶ふ前日長崎に在つて非常の酷暑に逢ひしが此の日肌冷かにして秋氣の動くを覺ふ急にフレンチルの襯衣を出だして之を着す左舷に朝鮮の群山を望み海上愈よ穩かなり

二十五日 未明に元山港に入る此港は大江半島海上に突出して連島尾と名くる小岬之と相對し其間に許多の群島散布

元山に入る

元山の景況

す港内廣くして大船も海岸に近い碇泊するを得べし蓋し朝鮮中第一の良港なり思ふに浦潮は西比利亞に於る一の要港なれども冬時氷結するを以て兵事上重大の不便利あり他日東洋に事あり露國の南下するときは或は鸞旗の此の港内に躡るを見るならん同行諸士と上陸して領事館に至りて當港の景況を尋ね去つて旅店福島屋に投ず當港の貿易は全く日本人の手に歸し居留地は概ね日本の家屋にて現今居留人七百五十名あり支那人は我が居留地の後に一構をなせども僅に五戸あるに過ぎず歐羅巴人は税關の役人傳道教師を合せて四五名なり元來咸鏡道は産物少く貿易の盛んならざる上に夫の防殺事件の爲めに我が國人は非常の損失を蒙り加ふるに昨年来穀の不熟にして土人の食糧をも他港より輸

入を仰ぐ程なれば居留地も之が影響を蒙り頗る不景氣の摸
 様ありと留港を去る十四里計りの處に永興府あり有名の金
 山あり年々發掘する金塊四十萬円内外なり多くは大阪及び
 上海に輸出す又此の地の特有物産は明大又は北魚と云ふ一
 種の魚なり全國中吉凶ある毎に必ず之を用ゆ冬期に之を獵
 し乾魚となして諸道に輸出す其價一ヶ年十萬円以上に及ぶ
 昨年留港の輸入九十四萬二千八百八十九円内日本三十六萬八
 百三十六円支那二十六萬六千八百八十五円同く輸出四十一萬
 六千六百三十円内日本十五萬五千五百五十円支那四千七百
 七円なり其餘は皆な朝鮮各港との貿易に屬す元山津は居
 留地を距る一里ばかりにして朝鮮中の一大市街なると聞き
 杉山笠井の二氏と俱に一遊せんとす時に日午に當り且つ雨

元山津

市街の汚穢

氣を催ふし溽暑甚きを以て海路を取り旅店の壯丁を以て通
 辨を兼ね船を盪せしむ漸く進み茅屋の岸上に相接するを視
 る愈よ陸地に近ければ臭氣の鼻を撲つを覺ふ船を細き棧橋に
 繋いで上陸し小巷を迂回して市塵ある所に出て數町の間を
 歩し風氣を發するもの幾度なるを知らず兩側の人家低くし
 て狭く且つ汚穢を極め加ふるに前日雨ありしを以て道路泥
 濘し雪隠より流出する糞汁泥水と相混し而して黄色の小塔
 處々に堆を成して往來を妨げんとし群豚グウ／＼鳴き乍ら食
 を汚水の間で啄し群犬は我々を視て吠へ乍ら人家の間に隱
 る其の不愉快なる名狀すべからず此處は京城に通する驛路
 なれども其の不體裁なる此の如し他の村落は推して知るべ
 きなり市街の後に小山あり歩いて之に登る元山の全景眼下

に在り南北長さ殆ど一里なるべし豚小屋の如き茅屋の間に
 雑り處々に瓦を葺きしものを視る皆な官人の宅なりと云ふ
 戸街の人口は二萬餘と聞けども固より戸籍も無き朝鮮のと
 なれば確實なる統計を知るに由なし山を下たれば路側に井
 水あり婦女數人褌を携へて水を酌み又は野菜を洗い居たる
 が我々の來るを視て驚いて人家の牆陰に隠る朝鮮に於て婦
 女は物を肩にすることなく大甕に盛りたる水にても之を頭
 上に戴く之に反し男子の物を運ふには皆な之を背に負ふ我
 が國人の二人にて擧ぐる能はざるものを負ふて絶へて困難
 の状なし蓋し背に非常の力あり能く重に堪ゆるは朝鮮人の
 特性なり再び船に乗つて居留地に歸る汚穢の土地を通過せ
 しが爲め氣色殊に悪し、重曹達を買ふて之を服し始めて胸

朝鮮人重量
を負ふ朝鮮人腐敗
を感せず

膈の開くを覺ふ海岸に二軒の料理屋あり曰く大芳樓曰く夷
 子屋と一樓上に絃聲あり仰いて視れば同船せし老西洋人許
 多の藝妓を聘して宴を張れり朝鮮人の魚類を籠に載せ之を
 負ふて元山津に歸るに逢ふ時に夕日燦が如くなれども蓋を
 なさず思ふに一里の路を往く間には腐敗を生むるならん前
 日釜山鎮に越く途中魚肆を過ぎしが魚を烈日に暴らすを以
 て往々眼爛れ腸出づ蓋し朝鮮人は魚肉獸肉の腐敗するもの
 を食ふを意とせず之を煎るに多くの唐辛を和するを以て臭
 氣を辨せずと云ふ釜山の近傍及び此の土地に於て目撃せし
 所に因れば山は盡く緒して樹木なし蓋し濫伐せしが爲めな
 り土地は頗る膏腴なりと見へ絶へて肥料を施さざれども米
 も善く成熟し野菜に至りては殊に繁茂せり然るに此國に於

耕作の摸樣

ては河川に堤防なく又旱魃に備ふる池沼等に至つては一も
之れ有ることなく一に之を天然の儘に放棄せり年々諸道に
凶作あるは毫も怪むに足らざるなり薄暮一酌して船に歸る
夜十時發錨す海上堵の如し

二十六日 波浪極めて平かなり朝鮮の北部に當る山嶺を海
雲の間に見る

浦潮に入る

二十七日 曉起すれば方さに群島の間を過く風急にして雨
あり然れども已に黒龍灣に入りて以て船少も動搖せず横濱
を發せしより海路千五百里を過ぎ一度も風波に逢はず實に
天幸なり露西亞島を廻りて浦潮港に入る灣口の最も狭き處
は凡ろ三百サアジョン(一サアジョンは我が七尺〇四分餘に
して岩石波上に立ち大松は相列して往くべからず之を過ぐ

れば廣き海灣となり「ガルトウペン」の砲臺の前よりして両山
相對し大河に入るの想あり而して要處々に砲臺を築き儼
然として犯すべからざる勢を示せり外國軍艦碇泊所を過く
佛艦二艘英艦三艘相對して碇泊す海關の前に至つて錨を卸
す其右は即ち軍港にして露艦五艘及び浮船渠二つあり海上
より陸を望めば丘阜起伏して大廈高樓處々に聳へ酷だ香港
に似たり一人の警部巡查を従へ小舟を飛ばして來り旅券を
調査する頗る嚴重なり風冷かなるを以て外套を着す税關吏
の來たらざるを以て船を下るを得ず待て十二時に至る幸に
して雨止む全行三人解舟にて上陸す税關に於て砂糖酒類寸
燐烟草等に嚴税を課し烟草一袋以上を携帶するも税を拂は
ざる可からずと聞き餘す處を冊に置き且牧野君より贈られ

旅館

し酒三瓶を餘したれども愛を割き事務員に與へり尤も税關の検査は時に從ふて寛嚴あり更に一定せず此の日上等客の手荷物の如きは検査をなさずして通過せり泥濘を踏み貿易事務館に至り野村氏を訪ひ旅館其他の事を依頼す當港に於て内外人の不便を感じるものは旅店の少きにあり露國の「ホテル」三つあり曰く「ソートイ、オロク」通名「ライッキ」間代上等三留中等二留下一留八十哥食事は一度一留なり曰く「モスクワ」間代食事共略ば前に同じ我々は此の二店の内に投宿せんとしたるに一つの明間なさを以て長崎屋(吉田)に投宿す港内の日本旅店は此の一軒に止まるを以て投宿者多く下等の如きは一小室に七八人合宿し凡て六十名の多さに及ぶ其の雜沓なると雪隠の汚穢なるには閉口せり宿泊料上等一留半

港内の模様

中等六十哥下等四十哥なり

浦潮は廣漠たる西比利亞を控へ日本海に面する一の要港なるを以て露國の國旗を此の地に立てしより未だ三十餘年に過ぎざれども商業を始め百事の進歩極めて迅速なり今や露國は盛に移民を務め大船渠の工事を起し西比利亞大鐵道に着手し年々兵隊を増加し又港の内外に於て砲臺を建築し其の規模の廣大なる驚くべきものあり思ふに今より十年を出でず此の港は世界無比の要塞及び軍港となり並に香港上海に次ぐ貿易場となるならん當港は兩山相對し屈曲して海を圍み長靴の形を成し前面に當り露西亞島ありて兩岬と相對し狭き海峡よりして黒龍島蘇の兩灣に出づ實に天然の良港なり港上は高低起伏し平面少く家屋概ね丘阜の上に立てり

川上俊彦氏の著せる「浦潮斯德」に港内の地形を記する詳明なるを以て其の一節を左に録せん

浦潮斯德は北緯四十三度六分五十一秒東經百三十一度五十四分廿一秒に位し彼得大帝灣に突出するムラウキヨールフアムールスキー平島の南端金角港と稱する港灣の西北岸及び黒龍灣の東岸にあり市街の延長は七露里(一露里は我が九町四十六間四尺)に亘り丘陵の半腹を斜下して海岸に達する狹隘なる土地を占むるを以て起伏高低一ならず(中略)市街の敷五十八スウエトランスカヤ街を主街とし外に小路四廣場四及び郭外の市街四あり而して家屋は各處に散在して或は山麓に或は阪路に或は山崖に在るが故に市區の設計を爲す困難なり

戸口

右の如き地勢なる上に家屋斷續して明地多く且つ巍々たる高樓の傍に矮少なる市塵あり故に海上より望めば如何にも壯大の觀をなせども陸上に就いて視察すれば頗る缺典多く未だ市街の體裁をなさざるなり戸籍の調査粗漏を極むるを以て詳細を知るに由なけれども某氏の調査する所によれば概するに戸數五千人口三万四千内外之を國別に分くれば

- 支那 一万五千人
- 朝鮮 二千五百人
- 日本 八百人内外
- 獨逸 七十人
- 英吉利 十人
- 露西亞 一万五千七百人

(内五千入内外は兵隊なり)

右朝鮮人及び日本人とも結氷中には多少の減員となるを知るべし殊に支那人に至つては過半芝罘又は牛莊邊より出嫁をなす勞力者にして春來つて冬去る故に結氷前及び解氷後には北支那と浦潮の間を往復する漁船は此等の支那人を以て充満すると云ふ此の如き各國人の混淆する場處なれば路上に於て目撃する所は一として奇異ならざる無し兵服を着くし劍を帯ひたる士官駿馬に騎つて馳せ去れば馬車に乗り窺窺たる貴女を伴ひたる紳士來る辮髪を垂したる支那人の一群と前後して汚穢なる木綿の衣裳を着くし髪を後に束ね重量の荷物を背に負ひし朝鮮人のヒョク／＼歩むを見る(浦潮に來る朝鮮人は咸鏡道の貧民なるを以て衣裳の清楚にして

港内の奇觀

頭に笠を戴くものは絶えて無し)日本人の往來するものは洋服あり着流しあり而して束髮棉服にて帯をも結ばずコック、下駄を鳴らして歩行するは山口長崎等より來れる賤業婦人なり之と前後して種々の摸樣ある紅更紗の服を着くし同し更紗の風呂敷の襟なる者にて頭を包みたるは中等以下の露國婦人なり兵隊去つて巡查來り軍歌を唱へ乍ら醉歩する水兵の一群を驅け援けて馳せ去るは乗合馬車にて御者は皆な露西亞人なるが紺の股引に紅更紗の服を着けぬ具に一幅百鬼夜行の圖と云ふべし余は到着の翌日より杉山笠井兩學士と此の地に於る二大工事なる大船渠及び鐵道の工事を見聞し并に當地の人々に就いて商業政治等の摸樣を調査せしが其の詳細は東亞の大勢中に掲げられれば二三の談話に供す

べき者のみを此の録中に筆記すべし

當港に於て英語は殆ど不通用なり諸方を見物し并に市中に出で、用事を辨せんとすれば露西亞語を要すれども我々は一語だも通せず加ふるに露西亞には羅馬字と異なる許多の文字あるを以て看板すら讀む能はず遂に啞の旅行中の人物となれり而して我々の諸方を見物するを得しは加藤商店の手代澤田氏ありしを以てなり然るに鐵道線路の視察の時の如きは誠に抱腹絶倒すべき者あり一日我々三名は内地に入つて鐵道建築の摸樣を視んとし加藤商店に至り馬車其他の世話を依頼す當日澤田氏差支あるを以て店の少年を通辨とす少年は此地に生れ露語を善くすれども日本語は却て不熟線なり一車一時間毎に二ルuppul(半)一ルuppulは我が六十

鐵道の視察

五六錢づ、と極め二輛を借る御者は例の赤更紗を着くせし壯年の露西亞人なり笠井君は通辨の少年と同車して先し余は杉山君と其跡に従ふ港内を過くれば峻坂にして左右に墓地あり遙かに海岸を望めば開鑿中の鐵道に工夫の往來する蟻の群るに異ならず愈よ進めば山嶺相連る波濤の如く而して道路は一直線に嶺上を奔るを以て一の峻坂を下だれば又一の峻坂を登る此の如き幾十回なるを知らず峻坂に逢へば御者頻りに鞭を加へて馬を驅り四輪轟々聲あり其の速かなる飛電の如く我々をして憚々たらしむ此路は浦潮より露都彼得堡に通する公道にして一萬露里の長さあり驛傳馬車に乗つて往來するを得べし我々は途中幾度も驛傳馬車に逢ふ布を以て三方を蔽ひ僅に前を開く構造堅牢にして鋼^{ハチ}塹^チなし

三馬又は四馬を以て之を曳き頗る迅速なり陰鬱なる溪間を過く路側の山上に兵隊の銃を手にして立つを見る御者之を指し我々に向ふて喃々すれども其の意を解せず彼れ遂に手を枕にして臥するの状をなす兩人相語つて曰く彼山は蓋し兵隊の見張番所にして夜も彼山に臥すと云ふ意味ならんと然るに述にて聞けば昨夜懲役人の逃れて山に入りしもの兵隊を要して之を殺せしかば他の兵隊來て死骸の番をなすなりと言語の通せざる往々此等の誤をいたす一笑すべきなり沿道に於て村落と名くべきものは一もあることなく滿目茫茫たる原野又は樹林に過ぎず處々に兵隊の野營を張り又は朝鮮人の天幕の中に居住するを見るのみ一の川に至つて鐵道を横貫す數百の兵隊囚徒盛んに土木に従事せり此より馬

車道は鐵道に沿ふて海岸に在り鐵道の橋臺及び暗渠は已に落成し堤防の成就せしもの六七分に過ぎず標札を立てしのみにて毫も工事に着手せざる場處も少なからず午前十時に浦潮を發し今や已に午後一時となり殆ど二十三四露里を走れり空腹を覺ゆるを以て三の川の驛傳馬車繼立所に入る官道に於て十二三露里毎に驛舎を設けて數輛の驛傳馬車及び馬匹を備へ而して旅客は其家に休憩し及び投宿するを得べし其の内に入つて視れば客室僅に二つに過ぎず汚穢極る椅子及び臥臺を設く紅更紗の服を着する老婆紅茶を温め客に供す携ふる所の行厨を開けは數千の蠅來つてテーブルの上に集り拂へども去らず浦潮に於て不愉快を感んずるは蠅の多きにあり爲めに午睡を爲すを得ざる程なるが港外に出れ

ば愈よ其甚きを覺ふ已にして二名の官人入來りて我々に詞を掛けたれども少年の在らざるを以て談話をなす能はず兩學士相語つて曰く二人の服裝を見るに鐵道技師ならん質問せんと欲すること多けれども「我口」の外に出て、歸り來らざるを如何んと三人代るく戶外に立て望めども少年の影だにも見ず官人は已に驛傳馬車を命し出去らんとす我々の失望知るべきなり稍やあつて少年歸り來れり兩學士は官人を戶外に要し日本の技師なるを告げ鐵道の摸樣を尋ねれども問ふ所と答ふる所と相齟齬す蓋し少年が鐵道に關する日本語を解する能はざるを以てなり技師曰く今日は多忙なり浦潮に於て再會を期せんと戸を出て、驛傳馬車に上る我々も馬車を呼んで歸路に就き薄暮浦潮に歸る余が西比利亞鐵道

地方制度

の一斑を知るを得たるものは全く兩學士と同行して其實地に調査せし所を聞きしに因るなり
露國は專制政治にして殊に西比利亞なる黒龍政區に於ては特別なる地方制度を行へども市又は郡以下は全く自治なり浦潮の如き軍務知事の支配の下に立ち而して市は獨立して適當なる人民より選舉せられたる議員あり市政を議決す又市長も人民の公選にして權力頗る大なり黒龍政區に於る地方制度の組織を聞くに左の如し沿海、黒龍、後具加爾の三州を合せて黒龍總督政區となし「ハッロフカ」に首府を置き侍中陸軍中將之が總督たり下に九十四縣「グベルニヤ」あり知事は軍人、副知事は文官なり縣の下に郡「ウエーゾ」あり郡長は官選なり郡の下に小郡「ゲナロスチ」あり即ち自治の團體にして其

政治の腐敗

の長は公選なり其の下にセロー(寺院ある邑)デンプニヤ(小邑)あり此の數個を合せて(ヴチロスチ)即ち小郡を成すなり此の土地に於ける政治及び社會の有様を見れば腐敗と云ふの外なし余は蒲潮に來り旅店の下女よりして「夜になつて外へ出さつしやると劍呑だす巡査が居りますから」の忠告を受けしことあり我國にあつて此言を聞くものは如何なる意味なるかと解する能はざるべけれども之を以て蒲潮に於る政事の秩序なきを視るべし蓋し此港は是れまで全く軍制の下に立てり其專任の知事を置き政事と軍務の區別を立てしは僅に三年前にあり然れども知事も軍人なり州廳の官吏も多くは軍人なり政事上に秩序ある進歩を見ざるは亦宜なり尤も現任知事ウンテルベルゲル氏(陸軍少將)は純粹の露國人に

非ず(蓋し獨逸人の血を混す)當港に駐在する他の將校と毎に意見相合はず性質温和にして頗る賢明の聞えあり毎日十一時より州廳に出づるや佩劍を解いて直に應接所に到り願訴ある者を前に呼び自ら紙面を受取り或は即坐に裁決し或は之を掛官に移す州廳の官吏は僅に二十餘名に過ぎず百事簡易にして書面等も受付を経由することなく如何なる賤民にても知事に咫尺して自ら願意を陳述するを得べし知事の正直廉潔なる決して情實又は賄賂の爲めに左右せらるゝものに非ず然るに其の紙面の一たび属官の手に落るや賄賂の多少によりて遲速を争ひ甚ければ黄白の力に非ざれば何事も許可せられず我邦の商人中一度或る掛官に交際を求め之を其家に招待せしことありしが爾後店頭に來つて勝手に品物

警察の亂暴

を去り決して代價を支拂ふことなし我商人も他日の利益を目的とし其意に戻らざるのみならず却て之を喜ぶの意ありと云ふ以て一般の有様を推知すべきなり殊に警察に至つては實に亂暴至極なり其の一二の例を擧げんに外國人の來遊して一週間以上滯留するものは旅券を警察に出し多くの手数料を拂ふて証明を請はざるべからず然れども通例幾度出頭しても警部は言を左右に托して証明を與へず而して豫定の期日を経過するときは之を招喚して罰金を命す此の困難を避けんとすれば五十哥又は六七十哥の酒代を掛官に與へざるべからず彼れ數十枚の銅貨を「ポケット」に押込めば直に几上に堆積する旅券の一枚を取り數行の字を書して之に押印す前日日本人は支那人の爲めに時計を奪ひ去られ後

日途中に於て之を物色し拳を揮ふて亂打するに際し巡查馳せ來り日本人を以て人を歐打せしものとなし警察署に拘引せんとす此の日本人は露國の事情に通ずるものなり巡查の側に到り耳語して曰く時計の出るあらば君自ら之を取れと巡查面に喜色あり支那人を捕へて去れり巡查の劔を帯び制服を着し乍ら酒店に入り兵隊又は馭者と對飲し躊躇して途中を巡行するを見受けることは毎々なり一日余の寓せし長崎屋に於て朝鮮人を使役し之に十哥を與ふ彼れ二十哥を要請し遂に一場の口論を開く巡查來つて仲裁をなし五哥を増さしむ之に従ひ銅貨五枚を出だせしに彼れ自ら之を占領し朝鮮人を門外に突出せり又一群の漂流人あり婦人は兩肩に數十枚の銀貨を掛け赤き更紗の衣裳を着け跣足にして途中

を往來し錢を乞ふ同宿數人樓上より銅貨を投し舞踏せしむ之を圍繞する者堵の如し一名の巡查も其間にあり舞踏終るや彼れ婦人の手中にある一枚の銅貨を奪ひ拳を揮つて支那人朝鮮人を歐打して解散せしめ傲然として去りしを以て我々は覺へず絶倒せり夜中往來稀疎なる際に於て通行するものに逢へば之を呼んで酒代を請て言語を解せざれば強逼して其金を奪去ることあり尤も此等の暴行を受くるものは概ね支那人朝鮮人にて日本人に至つては稍や安全なり然れども懲役人の脱走して山中に潜伏するもの往々夜中港内に來つて人を殺し財を奪ふことあれば注意せざるべからず昨年佛國軍艦の來航するや海軍士官一名上陸し夜中殺害に逢へり葬送の日に於て露國の樂隊士官は夜を冒して野營に歸ら

脱走囚徒

んとし亦狙撃せられて斃る當時逃亡者十二名あり因つて號令を港内に駐在する諸隊に傳へ大舉して近傍諸山を圍み林中を獵立て、七名を捕縛せり其餘は奔竄して往く所を知らずと云ふ今日も七八名の脱走者あり時々街道に出で、強奪を行ふ實に危険千萬と云ふべし

囚徒の取扱

序に懲役人を取扱ふ模様を記さんに今日鐵道の工事に懲役人を使用し晝は之を驅て勞役に従事せしめ夜は數十の天幕を張つて其の内に入る現今一の川近傍に屯在する懲役人は六七百名にて之を監督する兵隊は五十人なり而して夜中銃器を執つて立番を爲すものとは二三名に過ぎず日本人の考へにては極めて危険なるが如くなれども決して然らず若し懲役人の天幕を出るものあり之に「止まれ」の號令を掛け命

に従はざる時は直に之を砲殺するも妨げ無し若し懲役人の徒黨を爲し又は不穩の舉動あるを見認むれば尽く之を屠殺するを得べし是れ監獄長の皇帝より付與せられたる特權なり故に猛惡の懲役人も典獄兵隊に對しては群羊の虎に於るに異ならず又一奇事と云ふべきは逃亡せし懲役人を捕へて兵隊に引渡すときは五十留(金額は少く不確なり)の賞金なれども之を殺害して訴出るときは一倍の賞與を受く此に就ても露國の罪人に對する處置の嚴酷なるを見るべし

社會の腐敗

當地は支那朝鮮の賤民群を成すを以て社會の有様混亂を極めり此は暫く不問に置き上流社會の風俗に於て殆ど歎息に堪へざるものあり有夫の貴女が二人以上の男子に慇懃を通ずるは殆んど普通なり或る軍官の細君姪めり某人戯れて曰

く赤子の胸には生れながら十字架あるならんと蓋し有名なる教法家との間に醜聲あるを以てなり又た尉官などの細君に不品行あるは獨り情慾のためのみにあらず或る時は財産家の手を引て裁縫店に來り一の衣服を注文して其人より代金を拂はしめ數日を過ぎて又一の商業家を伴ふて市上を歩み請ふて臂圍を買入るゝなどは決して珍しきことに非ずと云へり蓋し物價高くして賈人の給料少く交際社會に立つの困難あればなり思ふに此等は遠く本國を出て社會の秩序未だ整頓せざる土地に來りしより生出せし現象にて之を以て露國全體の風俗を概括するは不可ならん

政事上社會は腐敗すれども其國民一般に教法を尊敬するは感心なり(表面上に止るものなるにもせよ)香港に西本願寺の

教法の尊敬

出張所あり矢田省三氏駐在せり氏の談を聞くに露國人は獨り其國教たる希臘教のみならず他の教法に向ふても尊敬を表す氏の法衣を着して往來するや海陸軍士官は皆な禮を爲し辭漢までも避けて路を讓る去日氏の遠征を試むるやニコリスクに赴く漁船中に希臘教の僧正あり氏が佛教の僧侶たるを知るに因り非常に懇切を尽し同船の陸軍少將をして上席を讓らしめたり深く内地に入りても到る處として官民の優待を受け數百里を往來し毫も不自由を感せざりしと黒龍政區中都府は云ふ迄も無く新開の土地にして僅に一村を成せば必ず公立の寺院あり蓋し露國は政教一致にして皇室の威權を維持する者は希臘教なり故に政治家は務めて教法を擴張するの政略を取り而して中等以下の人民は教法に向ふ

日本の賤業婦

て非常の熱心あり兵隊の死を視る歸するが如きも一に之を教法の力に歸せざるべからざるなり
 近來長崎及び其他の地方より賤業婦人の外國に出働くもの日に多く支那諸港は云ふ迄も無く太平洋及び印度の如き炎暑酷烈の土地に此等の婦人を見ざる無きに至りしことは世人の知る所なり然るに氷雪沍寒にして我國有髯男子の進入を憚る滿洲の内地までも充滿するは實に意外千萬なり聞く此地に於て公許せられたる日本の妓樓六軒にして娼妓の數は百二十一名あり本年四月の開氷より八月までの間に此等の婦人の手より日本に贈りたる金額は一萬三千留なり本港に日本商店の大なるもの六つあれども其の純益高は却て賤業婦に及ばすと云ふ歎すべく又笑ふべきなり去日内地を周

出働人危険
を犯す

遊せし者の談を聞くに都府は云ふ迄も無く村落の大なる者には必ず日本の娼樓あり「テラエエシンスケ」及び金山等蒲潮より日本里程三百里以上の土地に入りても多くの日本婦人を見ると近來外務省を始め中國西海の諸縣に於て頻りに賤業婦の出働きを禁止せんとすれども利益のある所は人力の能く防遏する所に非ず先頃薩摩九の長崎に碇泊するや警察官は細に船中を檢査すれども一の怪き婦人を見ず然るに發船の際に當り甲板上に吊せし「ポルト」の中より女の泣聲を洩せしを以て登つて之を視れば三名の婦人あり前日より此内に潜伏せしが炎熱の際にて貯ふる所の水尽き握飯も腐敗せしを以て饑渴に堪へず遂に聲を發せしなりと又次便にも巡査は桅檣に巻きし帆の間に簪の様なものあるを認め水夫

に命して之を開かしめしに危険なるかな十名の婦人高き桅上に潜伏せり因て之を陸に追上げしが其他は何處に身を匿せしにや此船にて蒲潮に渡來せしもの八名ありたり港内に於て取調の嚴密なるが爲め海外に出でんとするものは小舟に乗つて洋中に出で助を求むる眞似して漁船に登り甚きは水夫に頼み航海中石炭藏に身を隠すものありと聞く無用の干渉をなして毫も目的を達せざるのみならず却て之が爲め人命を危くするに至る實に政略を誤るの甚しと云ふべし余は「啞の旅行」の續篇に於て戲に醜業婦の洋行を妨遏するの不得策なることを記せり然れども是れ實に余の素論なり内地に於て正業に就かざるものは「トシ」外國に追出して金儲けをなさしむるは國家の一大利益ならん東洋の諸港を視よ

各國の賤業婦あらざる無し然るに行政上の處分を以て婦人の外國に赴くを止むる様な馬鹿らしき處置を爲すものあるを聞かざるなり殊に文明の中心と云はる、巴里や倫敦は如何なる有様なるか我が國人は潔癖の甚しと云ふべし尤も合衆國の如く賤業婦人の上陸を拒絶するときは我國にても保護の目的により相應の取締をなさざるべからざれども其他の諸國に至つては勝手に渡航を許し賤業婦人を以て移民の先鋒となすべし浦潮に在る人々の中にも賤業婦の渡來を以て日本人の品位を落すと爲し政府の之を防遏せんことを希望するものあり曰く我商人の内地に入り露國人より君は幾多の婦人を伴ふて來りしやと問はる、ことは毎々なり且つ港内にゐる婦女は皆な賤業者と同一視せらるゝに至る

實に痛歎すべきなりと余は云ふ然らす我國の正業者をして盛に浦潮及び内地に入込ましむれば二三百の賤業婦ありども毫も露人の注意を引起するに足らざるべし今日の勢を爲す者は全く有鬚男子の奮發力なきにあり何を賤業者の海外に侵入するを咎めんや聞く明治十四年頃に當り陸軍士官某氏清領滿州の探檢を試み山河を跋歩して寧古塔に入り自ら謂らく古來より日本人にして此地に來りし者は編り余のみと意氣揚々たり已てにして木屐の響あり一婦人の來るを見る即ち日本人なり怪んで之を問へば曰く數年前より支那人に従ふて此地にありと某氏憮然として一時を賦す其の結末に曰く豈料三叉江上路有人先我入寧城と又今より十年前我が國の軍艦露領ボシエツト港に入る全港は軍營の所在なり

乗込員一同上陸したれども露語を話す者なければ市街を一見して船に歸らんとせしに一婦人之を呼止め其情人なる露國士官の家に案内して自ら通辨をなしたるを以て幸に兵制の一斑を開くを得たりしと今日我國の男子は國內に閉塞し進んで海外に向ふて事業を企るもの、寥々たるに際し孱弱なる婦人の身を以て炎暑を畏れず氷雪を避けず萬里の波濤を越へて遠征を試む其の氣象の盛んなる有髯男子を慙死せしむるものあり余は賤業婦の出働きを以て國家の名譽とは思惟せざるなり然れども内部の汚穢を外に示さざらんが爲め強て之を防遏するは全く無用なるのみならず決して其目的を達する能はざるべし余は之を自然に放棄し移住民の先鋒者たらしめんと欲するなり

商業

當地の商業は獨逸人の手に歸し次は露人其次は支那人なり我國は遙に其下にあり我が商店は重に雜貨を商ふ其の大なるものは曰く杉浦曰く加藤曰く松尾曰く江村曰く小林曰く木村曰く石橋なり而して諸外國の商店の大なる者には必ず日本人の番頭あり當地の輸入額千八百七十七年には一百万二千五百三十六ルウプルなりしが千八百八十九年には増して五百七十八万二千三十六ルウプルとなれり之を國別とすれば

○獨逸ウアルベルス

二百〇一万六千六百八留

○露國各商店

百六十万一千八百四留

○支那各商店

百廿五万六千七百六十五留

○ランゲリイデ商店

二十九万四千四十五留

○各國諸商店

二十三万九千五十二留

○日本六商店

十八万二千九百七十七留

○獨逸商

五万九千九十五留

○米人ハケヌール

四万四千百三十留

貿易事務官の報告に因り一昨年及び昨年日本人の輸入せし貨物の原價を擧ぐれば

廿三年

二十一万五百九留四十四哥

廿四年

二十三万六千二百七十九留九十八哥

亦以て我國貿易の日に進歩するを見るべし然れども地形上最も便宜の地に立つ我が國の輸入は斯く少額にして獨り獨逸商に及ばざるのみならず之を支那商に比するも遙かに其の後に立つものは亦我國人の露國の貿易に注目せざる一証

なり

余の此行は遊歴する場所多きを以て直に東京丸にて朝鮮に向ふ考へなりしが在留の官吏諸紳士とも頻りに余を止めて曰く此れまで我國の政治家にして此の地に來るもの太だ少く偶ま來るも數日にして歸り去るを以て浦潮の真相を日本に知らしむるに由なし實に遺憾なり請ふ後便まで滯留せよ調査の事件の如きは各自擔當して子のために便宜を與へんと而して余が調査せんと欲する材料も未だ全く集らざるを以て遂に後便を待つに決す笠井杉山の両學士は三十一日發の東京丸に乗つて出發せり海外に在つて二人の新知已に別れ河梁風雨の感なき能はず夫れより日々貿易事務官及び在留の軍官諸商店を訪ふて兵制及び商業等の景況を聞き又は

旅店にあつて報告を認め夜分に至らざれば睡に就く能はず一の同行あるを以て「ボシエット」に遊ひ海港及び兵營の模様を一見せんとせしが大風雨なるを以て果さず浦潮に於て全く十九日を費やせり

浦潮の出發

九月十五日 別を浦港の新知巳に告げ午後三時薩摩丸に上る此港に於て警察の保証なきものは乗船切符を賣出すを許さず而して保証を求むるには貿易事務官の紙面と旅券とを警察に差出し貿易事務官に七拾五錢警察に八十一哥カペーキの手數料を拂はさるべからず其の手數の繁雜なるを以て旅客は多く船中に於て切符を買ふ此の如くするときは船賃に割増あれども日本紙幣にて差支なきを以て露貨の相場に因りては却て利益を得ることあり尤も日本人なれば警察に於て之を

不問に置けども支那人朝鮮人の切符を所持せざるを見出すときは決して乗船を許さずと云ふ序記すべきことあり上海及び神戸より東京丸薩摩丸の二艘を以て毎月二回づ、浦潮へ定期航海を爲し我國に取つては最も重要な航路なるが郵船會社は其の代理店を獨逸商「アルベルス」に托し會社より一人も出張員なし故に日本の銀貨紙幣とも我が商店の間に行はるゝに拘はらず郵船會社の切符を買ふには露貨を以てせざるべからず我が國人に取つて一大不便利なり且つアルベルスの旅客荷物を取扱ふに不親切なる所あり當時露國の汽船會社「シユウエリヨフ」は政府より一海里三「ルウアル」の保護を得て盛んに競争を試みんとする模様あれば余は深く郵船會社のため之を危み數度の通信に於て速に此が準備をな

郵便會社の不注意

さゝる可からざることを論んせしが果して余の出發後に在留支那人同盟を爲し凡ての荷物を郵船會社の漁船に積まざることとを決議し郵船會社は之に對し非常に運賃を引き下げたりと聞く事の茲に至りし者は全く會社の不注意に歸せざるべからざるなり寺見八代野村杉浦等の諸子送つて來るもの十余名あり寺見氏は嚮きに當港の事務官たり西比利亞内地を経て露都に入りしもの既に兩度に及ぶ最も露國の事情に通曉す今は淺野商會のために此の地に出張せり八代氏は海軍大尉なり不日寒風を冒し唐太を始め深く内地に入らんとす氏は余に向つて頻りに同行を勧められたれども身に病あるを以て之を辭し氏を送る長篇を賦せり野村氏は書記生にして露語を善す杉浦氏は先年失敗せる貿易商會の迹を引

再び元山に入る

受け當地に於て日本商人の第一に位せり同行に加藤八木の両氏あり加藤氏は大阪人にて其の雜貨店は杉浦に次げり八木氏は余の同縣波瀾濱の人にて豪家を以て聞へ是れまで朝鮮の貿易に従事せしが進んで浦潮に入り大に計畫する所あらんとす年壯にして志大なり前途期すべし港内を出づれば船少しく動搖す風烈しからざれども積荷なく吃水淺きを以てなり浦潮の輸出は殆んど絶無なるを以て每便空船にて歸らざるべからずと云ふ昨日より北風冷かにして冬景色となり外套を着して尙は寒さを覺ふ

十六日 波濤高からず南に奔るに従ひ漸次に温暖となる午後六時元山に入る港内に子船二艘の碇泊するを見る俱に入木氏の所有船なり上陸して福島屋に投し通信を起草し何人

をも訪問せず氣候温暖なるを以て窓を開かしむ樓婢曰く當地は兩三日前より急に涼氣となりしと浦潮とは僅かに三百餘海里を隔て、氣候の異なる此の如きものあり

十七日 未明に起きて筆を執り午飯後領事館を訪ふ朝鮮國王の誕生日なるを以て徳元府使は當港に來り午後一時より領事を始め重もなる在留人を饗應すると云ふ朝鮮に取つては第一の祝日なれども官吏を除くの外は多く之を知らず一の奇談あり當港の税關長はデノマルク人にて外にも一名の外國人あり然るに近來は輸出入極めて少なきを以て政府より金を出さず二人とも月給を請取らざるもの已に三ヶ月に及ぶ今度も薩摩丸にて陸揚げせし輸入品は一梱に過ぎず其の失望想ふべきなり此港より京城迄陸路五十里なり驛又は

再び釜山に入る

馬に乗り六日又は七日にて達するを得べし嚮きに笠井杉山兩氏と此路を取つて京城に出ることを約せしに兩氏已に歸り去り而して仁川の青山好惠氏より手紙を贈りて陸道の危険なるを説き且つ船中にて開けば途中の旅店極めて汚穢なるのみならず山中に強盜あつて旅人を劫し且つ猛虎の闖出することあるを以て遂に陸行を見合せ海路仁川に趣くこと、なせり夕景船に歸る風濤極めて穩かなり

十八日 天曇り海上風無し午後二時釜山港に入る大雨沛然たり已にして又晴る八木氏と俱に再び大池に投ず八木氏は當港より直に門司に趣かんとす商船會社の漁船方に發航せんとし已に漁笛を鳴す因て匆々別を告ぐ加藤氏も上陸後或る商店に趣きしが相見るに暇あらずして去れり此夜雨頻に

至る當港は數日前より霖雨止まらずと云ふ夜暑熱を覺ふ浦潮にて冬に逢ひ元山にて秋となり釜山に來れば殘暑未だ退かず時候の逆退せし想あり

十八日 午後雨歇む領事館を訪ふ室田領事京城に趣き在らず築田書記外數名と對談し辭して寓に歸り行李を整へて出でんとするるとき郵船會社支店長柳氏より出船の六時に延びしを報ず天曇り雨の至らんとする摸樣あるを以て直ちに旅店を出て郵船會社を訪ひ別を柳氏に告げて上船す築田氏送つて船に來るビールを命じ一杯を傾けんとす辭して曰く數日前室田領事の少女誤つて樓より落ちて死せり爲めに多事なるを以て久しく止るべからずと室田氏京城にありて此の報を聞き其の悲歎果して如何なるべきや六時發船す

十九日 朝鮮の西海岸は處として島嶼ならざる無し大嶋去つて小嶋來り其幾十百なるを知らず我國の内海に彷彿たり然れども多くは岩石にして樹木なきを以て風致を失ふの憾なしとせず遙に濟州島を水雲の間に望む海風太だ強からざれども波濤頗る高く船動搖す蓋し前日大風の餘波ならん食堂に出つるもの僅少なり筆を把る能はざるを以て終日甲板の上を徜徉し釜山の龍首山に於て加藤肥州の祠堂に謁する長歌を賦す余は極めて船に強く航海中食量非常に増加し風浪ある時にも三度の食を廢せしことなし然れども船の甚く動搖するときは多少不愉快を感す之を遣るには一瓶のビールと吟哦とを以てす詩興の勃々たるに際すれば几案顛倒するも平地にあるに異ならず余は是に於て吟詩の安身立命に

仁川港に入る

益する所なきに非らざるを知る夜に入り波濤稍や穏かなり十九日 天晴れ風静かなり午後三時仁川港に入る此地海潮高低の差は三十二尺に及ぶ世界中米國の或る海岸を除き他に比類なし干潮に際すれば海上沙現れ大船は遠く一里外に碇泊せざるを得ず此の日満潮なるを以て近く海岸に接して投錨す第一銀行支店長西脇氏朝鮮新報主筆青山氏外數名來り迎ふ二氏は俱に余が同里の人にして青山氏の家は余の東隣に在り相別る、數年海外に相逢ひ懷舊の情に堪へず海岸の一帶を除くの外は概ね丘陵にして人家皆な峻阪の上にあり旅店水月樓に投ず家屋の清潔なる朝鮮諸港中に冠たり余は先づ韓城に入り夫れより天津北京に趣く積りなりしが今度の便船に後るれば天津に趣く汽船の來る一ヶ月の後にあ

芝罘に入る

り歸航の際白河水結の恐れ有り之に加ふるに浦潮港にて別れし杉山工學士韓城に一遊し今や來つて此港にあり黃海を渡つて天津に趣んとし余に同遊を勸む因つて先づ北支那に遊ひ歸路に朝鮮の事情を探るに決し此夜十一時杉山氏と俱に再び玄海丸に乗る西脇青山の両子送て海岸に來る

二十日 四時發錨す海水平なる砥の如し

二十一日 早朝芝罘港に入る史記に始皇二十九年登之罘刻石紀功とあり即ち此地なり支那人は烟臺と呼ふ港内に烽火臺あるを以てなり地勢屈曲して灣を成し前に芝罘島あり風景頗る佳なり中間に突出する半島の丘山に日本及び獨逸の領事館あり水を隔て、之と對する高阜の上に隱々として白壁の如きものを見る望遠鏡を把つて望めば砲台なり是れま

港内景狀

で支那風の建築にて實用をなさいりし近來大に改良を加へり砲台の内外に駐在する兵隊は凡ろ二千内外なるべし又半島の東に當る丘上にも砲台を造る計畫あり未だ成就せず此の港を距る三十英里の處に威海あり即ち北洋艦隊の鎮守府なり而して盛京省の半島洋中に突出して芝罘と相望み黃海の口を扼し最も要衝の地なり此の半島に一大港あり旅順口と云ふ即今縱渠を設け水雷舟を備へ威海と對立して犄角の勢を成すと云ふ解船に乗り上陸し領事館に至り久水氏に面會す書記生白須氏は前年亞西亞學校にありしを以て予と相識れり聞く此の港の人口三万五六千あり本年七月輸出入の元價百十五万三千三百十二兩餘にして日本よりの輸入は七千七百一十一兩同輸出一千〇七十兩に過ぎず近年までは北海

人口及び商業

道より多く昆布を輸入せしが漸次に浦潮近傍より來るもの、ために壓倒せらる、有様あり日本人の此の地にあるものは官吏を除けば多く洋人支那人の妾にて商人と謂ふべきものは一人もあることなし領事の談に山東の人民は最も節儉を以て聞ゆ故に贅澤品は到底販賣の望みなし雜貨并に陶器等に至つては大に見込あり然るに我が國人の自ら來つて貿易を爲すものなきのみならず當地の商況を問合するものすら太だ寥々たりと我が國人に進取の氣象なき歎息すべきなり白須氏の案内を請ひ烟臺に上る高丘の上に望樓を設け四方繞らすに煉瓦の牆壁を以てし港内の全景眼下にあり烟台は烽火を上げて警を報するものなり明代に於て夫の倭寇と稱する我が國の海賊此の近海に出沒せり烟台は其の時に造り

しものなり今日は桅檣を建て「シグナル」を掲げて船舶の入港を報ずるの用に備ふ支那町を周遊す道幅狭くして汚穢なり然れども此の土地は他の開港場に比すれば大に清潔なりと云ふ空氣極めて乾燥なるを以て頭痛を感じ久く陸上に居る能はず船三時を以て發す

廿三日 海色黄を成す蓋し黄河及び白河より泥を流出すを以てなり黄河の名空しからず已に太沽タクに近けば瀛船帆船の海上に碇泊するを見る望遠鏡を把つて望めば岸上に許多の人家あるを認む然れども千里山なく目の極まる所は茫々として海の如し地勢の平曠なる知る可し時に退潮に會し且つ船に積荷多く吃水深くして河流を溯るべからざるを以て海心に止り號旗を建て船を呼び荷卸をなす運送船兩舷に曠し

太沽灣に入る

「ウイソケチ」を轉するの聲器々として數時間に渉る太沽タクより天津まで鐵道ありて一日三度往復す我々は早く解船に乗り上陸して直に天津に趣かず空く半日を濁流の混々たる河口に費やせしを悔ゆ四時過ぎ錨を揚げ運轉を始めしが沙に礙して進まず再び船を呼び荷物を卸す夜半に至るまで止まず聞く太沽の海上に沙泥の爲め大船の出入を礙くる場所二つあり外國人より浚疏をなさんことを要求すれども支那政府は拒で容れず蓋し之を以て海防の一となせばなり思ふに白河の口の砲台を守れば外國の戰艦は決して河流に入る能はざるべし然に沙泥の壅塞を自然に放棄し之が爲に貿易上に重大の妨害を及ぼすを願みず支那政府の政畧は豈に迂遠千万と云はざる可けんや

廿三日 睡覺ひれば船少しく動搖し進行をなすもの、如し急に起て甲板に出づ船已に白河に入る河の廣さ一町内外なるべし水流濁りて黄色をなす岸に沿ふて處々に蘆荻の叢を成すを見る兩岸には揚柳多く其間に村落あり人家は壁を始め屋根まで泥土を以て之を塗り遠く望めば燕巢に彷彿たり寺院及び役處の外には瓦を葺きしもの太た稀れなり此の河は俗に九十九曲ありと云ひ其の蜿蜒迂回する羊腸に異ならず舟の進行するや西に往くかと思へば忽ち東に轉じ或は南し或は北す瀛船あり上流より來り我船と行違ふて去る已にして前に當り黒烟の颯へるを視る衆皆指して曰く瀛船又來ると何ろ料らん是れ嚮きに出逢ひし船ならんとは河上一の堤防なく兩岸泥土にして水を去る高さ二三尺に過ぎず然る

に水流深く千噸以上の大船も岸を摩して過ぎ更に障害なし而して屈曲の甚しき處に至れば頗る運轉し難く一度船を岸上に乗揚げ然る後進行するとも往々之れ有り陸上の鐵道を望むに一直線を爲し水上に立つ余戯れに曰く田間に輪船を浮べ水中に鐵車を馳す北支那の一奇觀なりと土地平にして水流緩かなるを以て一の堤防を要せず亦堤防に用ふべき木石等もあることなし偶まに修繕を爲すときは葦を編み又は砂を布に盛りて之を積上ぐるに過ぎず狹隘なる河流に船舶の往來する織が如く水波岸を拍ち而して崩壞の患少なきは太た奇なり然れども河に臨みし土地は漸次に水の爲めに噛まれ人家の河中に陥らんとするもの亦少なからず且つ河水の暴漲により屢は大害を起すことあり現に一昨年非常の洪

水あり本年も秋霖虐をなせり岸上處々に大沼あり白浪雲と接し其の廣き幾十里なるを知らず皆な耕地の水害に罹りしなり又小高き處にある人家は僅に流亡を免れたれども水の爲めに圍繞せられ舟によりて往來するものもあり河流に接すれども此の近傍には一の水田なく其の産する所は黍又は玉黍の類なり太浩マホより天津まで陸路三四十英里なれども水路は屈曲多きを以て六十八英里に過ぐ午後二時天津に入る居留地は紫竹林にあり即ち白河の左岸なり許多の棧橋を設け漁船の定繫に供へ岸上荷物の積堆する山の如し貿易の盛んなる想像すべきなり車を馳せて領事館に至り荒川氏を訪ふ氏は杉山氏と全窓の舊友にして余は前年龍動にて相ひ識れり款談數刻辭して裕泰號に投す半洋半清のホテルなり店

天津に入る

天津城内に
遊ぶ

主は支那人にて諸外國語を始め日本語に通ずホーイ中一名僅かに二三十の日本語を解するものあり其餘は多く英語も通せず爲めに「啞の旅行」の新材料を得る少なからむ此の夜荒川氏に至り日本料理の響應を受く

廿四日 頭痛を覺ふ午後病を力め杉山氏と車を雇ひ天津城を一覽す城の内外には人口九十万ありと云へり道路狹隘にして人馬雜沓し爲めに往來すべからざるに至る市街の入口に「路窄人多勿馳馬」の額を掲ぐ此揭示なきとも能く馳騁する者あらざるべきなり數里に列なる市街には荷物堆を成し商賈の盛んなる殆んど意想外に出づ晚景寓に歸り支那料理を喫し杉山氏と散歩して領事館に至る昨夜約する所あり報告書類を調査せんが爲めなり談話中忽ち發熱を覺ゆ頭痛岑々

として坐に堪ゆる能はず已にして嘔吐するもの數回扶けられて車に上り困頓して睡に就き夜半眼を開けば一燈影暗く而して隣室には數名の客あり妓を聘して酣飲し絃聲歌聲壁に震ひ交るに搏戰の聲を以てす衾中詩を思ひ未だ成らず翌日之を續成す隔壁絃聲添感慨照牀燈火伴幽寥の句あり蓋し實録なり

廿五日 頭痛未だ止まず來客に對して談話を厭ふ荒川氏入を以て病を問ひ稍や間なれば薄暮より來遊せんことを請はる此の夜一小宴を開くを以てなり強て之に趣きしかども飲食ともに味なし宴終れば直に杉山氏を強て寓に歸る

廿六日 霧雨精神爽快ならず余は最初杉山氏と輿に瀛車に乗りて開平に至り石炭坑を一見し夫れより北京に趣て長城

に出で再び天津に歸りて李中堂を訪ひ然る後歸途に就く考へなりしが今は北京の旅行を厭ふの意を生せり北京に趣くには二路あり陸よりせんか二晝夜を要し支那の馬車にハチなくして極めて破損せる道路を奔るを以て動搖甚しく爲めに頭を打ち腦を傷め疾病を發するものありと云へり水路よりせんか四晝夜を要し舟を濁流に浮べ汚水を飲まざるべからず且夜中風寒く瘴氣に觸るゝの恐あり病後に於て兩者とも不可なり因て歸心あり之を新舊の知己に謀る或は勸め或は止む止むるものは余が此地に來り北京及び長城の行をなさざるを惜むなり勸むるものは北支那の氣候余の体に適せず爲めに大病を發するに至らんことを恐るればなり余は遂に後者の説に従ひ此の地を去るに決す玄海丸の發する明曉

にあり此の便を失へば來月下旬まで朝鮮に趣く便船なきを以て一日も猶豫すべからず薄暮別を荒川氏に告げて寓に歸り杉山氏及び新知已數名と一小酌し夜半雨を衝きて碼頭に至り玄海丸に乗る

余は天津に來つて病に罹り且つ滯留四日に過ぎざるを以て政事上商業上に就き精細の觀察を爲す能はざりしは遺憾千萬なり然れども其見聞せしものは盡く之を手帳に記し置きたれば東亞の大勢に論述せるものを除き其の要領を左に掲載せん

天津を一見して余の意外に出でたる者少なからず第一は北方に於る支那人の軀幹長大なるなり我々は日本の諸港に於て多くの支那人を見る其身體は日本人に異ならず上

海に往き浦潮に遊び朝鮮の諸港に趣き逢ふ所は皆な大同小異なり故に支那人は孰れの地方にても皆な然るならんと思惟せしが一たび天津に到り碼頭に群集する人足を視て其の長大なる殆んど我國の力士に彷彿たるに吃驚せり夫れより居留地を歩行し又は天津城に入り其の往來する人民に雲を突くばかりの大男少なからざるを視るなり蓋し東洋に於て西洋人を土人に比すれば鶴の鷄群に立つに異ならざれども天津にては然らず思ふに此地の支那人は西洋人を以て決して長大の人民と思惟せざるのみならず或は其の短小を笑ふものあらん蓋し今の直隸省は古の燕國にて六國の時にも雄武を以て開け歷代毎に北方よりして南方を制し齒并十六州を得しより大遼の勢力愈々強大

となりしが如き他の原因あるにもせよ人民が軀幹の長大
 勇壯なるものも亦興つて力ありしならん支那人の外國へ
 出稼きするは多くは廣東を始め上海近傍芝罘牛莊等浦潮
 及び朝鮮に出るものは過半芝罘及び牛莊よりすの人民に
 して天津及び北京よりするものは極めて僅少なりと云へ
 り我々が今日まで隣國に此の長大の人民あるを知らざり
 しは此が爲めたり余は天津を一見し思へらく此の勇偉な
 る人民を訓練するに西洋の兵式を以てす宜なるかな李鴻
 章が引率する兵隊の諸省に冠たるやと然るに李氏の兵隊
 は多く安徽の勇にして土地の人民を取らずと云ふ勇とは
 志願兵の謂なり李氏は合肥の人にして安徽の兵を以て長
 髮賊を平げたれば今日に至るまで其部下に南人多きは故な

北支那人の
 氣風

きに非ず天津に於て兵隊巡查等は平人より短少なり余の
 見る所を以てするに互に其力を角せしむれば北人の南人
 に勝るや固より論するを待たざるべし而して北人の長ず
 る所は獨り軀幹のみに非ず久しく此地に在て商業に従事
 するもの、賤を聞くに天津近傍の人民は謂所る燕趙悲歌
 の氣慨あり商家も信義を尊び契約を重じ絶て浮躁輕薄の
 風なし故に一たび信用を得れば取引上極めて便利なれど
 も少しにても不都合の舉動ありて擯斥せらるゝときは再
 び信用を恢復するの道なし商業上の取引に一種の習慣あ
 り例へば日本より材木を輸入し問屋に掛合を爲し直段の
 折合ざるより一方に於て手を引くことあらんに其後ち價
 を下げて之を賣却せんとすれども孰れの間屋に於ても取

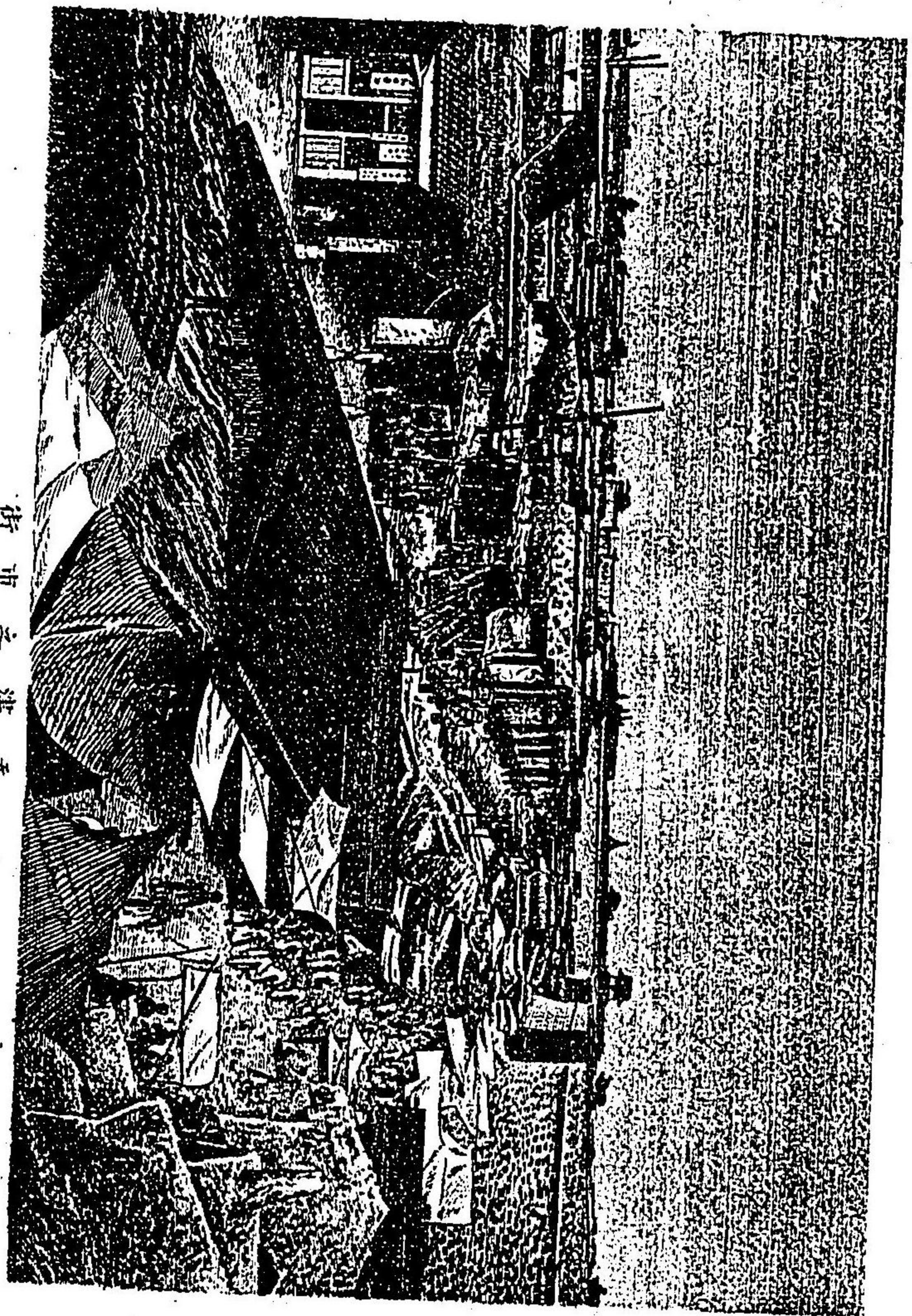
貿易の繁盛

合す(同盟の堅固なるは上海其他も全一なり)跡便にて輸入する材木の來たるを待て新たに價格を定めざるべからずと第二は貿易の繁盛なるなり黃海を過ぎて太浩ホクに到れば河口に桅檣の林立するを見る已に白河に入れば支那製の運送船が材木又は各種の物品を積み來往する間に於て招商局及びヂヤアデンマルソン會社等の汽船烟を揚げて駛走するを見る已に天津に到つて碼頭を下れば税關を中央とし前後八九町ばかりの河岸は荷物堆積して丘阜を成し僅に其間に往來を通ずるを見る居留地を出で河岸に沿ふて西行すれば運送船の河中に充満し篙竿林を成すを見る已にして天津の城内に入れば九十餘万人を有する大市街は各店に内外の物品を羅列し性來絡繹として織るが如き

天津城内の
景況

を見る蓋し天津は三億萬の人民より成る大帝國の中心たる北京の咽喉を扼し而して北部支那の物品は多く此處に於て交換せらるゝを以て此の盛大を致すなり第三は天津城内の意外に清潔なるなり余は前年歐洲よりの歸途一たび上海城に入り其の汚穢なるに驚き鼻を摘んで逃脱せしことあり而して支那の諸港より歸りし者は孰れも市街の不潔なるを説かざる無し今回の漫遊に於て先づ芝罘に遊べり余が携ふる所の案内記によれば此處は他の支那町に似ずいと清潔なりとあり然れども汚物街上に流れ人をしめて嘔氣を發せしめたり因つて天津は如何なるべきやと想像せしが其の實地を見れば決して然らず城廓は煉瓦を以て之を築き東西南北に大門を設け中央に鼓樓あり四方ア

一チ形にて夫れより四大門に通ず城の内外に在る市場の
 廣は之を調査する能はざりしが概略大阪の南區西區を并
 せし位ならん街上孰れも市塵ならざるは無く路幅も先づ
 大阪の船場と太しき異同なし而して往來雜沓し加ふるに
 人力車織るが如く雙方より押掛け進む能はず退く能はず
 爲に數十分を費やせしもの幾回なるを知らず直隸總督衙
 門の門前に少し廣場あり人民群を成し羨賣屋もあれば菓
 物店もあり粗服を着し怪しき聲を發して辻講釋をなす先
 生もあり門標を讀まざれば其の側に立つ家屋は有名なる
 李鴻章の政事堂たることを知る能はざるなり其の商賣の
 盛んなるを云へば四方數里の天津は到る處として大阪の
 心齋橋筋なり其の雜沓を云へば東京琴平神社の縁日に於



市之津天

氣候猛烈

る久保町通りなり固より横町筋に入れば許多の陋屋あり
路上往々不潔を見れども本通りは盡く石を敷き一の汚物
なく亦臭氣の鼻に入るを覺へず決して上海など、日を同
うして語るべからず或る人笑つて曰く子の此の感覺を起
せしは其豫想の甚さに過ぎしと朝鮮の各地を漫遊し日に
汚穢に慣れし故ならん清潔なる日本より突然と天津に趣
けば必ず非常の不愉快を感せしならんと或は然らん天津
には一の清水なし濁流黄色を成す河水を酌み明礬を入れ
泥を沈澱せしめて之を飲み割合に病人の少きも意外なり
氣候の猛烈なる酷暑の時には百五六度に上り寒中には零
度以下六度まで降ることあり此地にては防寒の爲めに風
道を四塞せしむるを必要とするのみならず炎暑に際し屋

外の空氣燠くが如くなるに因り日中は牖戸を密閉し毫も風を通せしむ可らず故に家屋は概ね此目的に従ふて建築し太だ幽鬱なり余の投宿せし裕泰號の一室の如き廣さ八疊敷ばかりにて四壁は厚き煉瓦にて前に小き一枚の戸あり而して後に二尺四方位の小窓二つを鑿ち此處にも少し許りの明り取りを置きて板を打付けたり故に室内暗黒にして空氣の疏通惡く獄中に在るの想あり氣候と云ひ家屋の構造と云ひ亦意外千萬なり更に一つの意外なるものあり何ぞや一葦水を隔て、相對する支那の一大貿易港にして我商民の渡來する者少く日本人の直接に従事する商業の微々として振はざること是れなり居留地にある外國人の數を擧ぐれば三百人以上なるべし内獨國と英國とは殆

日本の商店

と相平均し合せて二百五六十人露國十四五人佛國五六人日本人は概計四十人なり四十人と云へば相應なる人數の如くなれども官吏を除き其餘は多く洋人又は支那人の外妾にして眞成に商業家と云ふべきは幾許もあることなし是れまで我國人の商店を天津に開て失敗せしものを擧ぐれば東亞貿易商會、大倉組、久次米商社等にて其の他は屈指するに暇あらず老商に就て其理由を問ふに此の土地は商業上の組織已に整頓し取引は一に信用に在るを以て老舗に非ざれば誰れも之を顧みるもの無し現に天津城内の商人の如き其の店頭には成るべく古き額を掲げ招牌も故さらには敝れたるものを用ふる習慣あり然るに我國人は新たに來つて利益を博取せんとし一時に目的を達する能はざ

失敗の原因

れば忽ち失望し而して出張員は氣候の激烈なるに苦んで急に日本に歸らんとし事業の維持すべからざるを報告し遂に閉店を爲すに至る且つ是れまでの經驗に因るに商店の失敗せしは多く出張員と本店との意見相背馳するに基くもの、如し故に北支那に於て商業を營まんとすれば資本主又は會社の重なるもの己れの信用する番頭を伴ふて渡來し自ら實地の事情を見聞し然る後日本に歸り此地に残せし番頭と氣脈を通じ商機を誤らざるにありと余は浦潮港に於ても商家の基礎を立てし者は往々此の手段を取りしと聞く亦外國貿易に志あるもの、注目すべき所なり各商會の失敗せる間に屹立せる者は三井物産會社なり内部には多少の困難あると聞けども三井と云へば居留地を

始め天津城内の重なる商家に於て知らざるもの無し海外に此の信用を得るは決して容易ならず我國の爲めに其の事業の益々盛大とならんことを望む次ぎは雜貨商武濟號なり去る十九年に始めて一小店を開き許多の艱難を経過し今日は已に名を内外人に知らるゝに至れり資本主武内材吉氏は日本に居り手代奥村氏天津に在つて取引に従事す岸田吟香氏の藥肆樂元堂中に綿花公司あり樋口忠一氏東京小名木川の綿布會社にて製造する縮を販賣し頗る聲價あり又松昌洋行あり高木信二郎氏北海道より來つて材木を販賣す年々當地に輸入する材木は平均四百萬円の多きに及ぶ重に滿州及び福州より來る當地に於ては殆ど日本の材木あるを知らざる程なり是れまで日本より輸入を

白河口の大砲台

試みて失敗せしもの少なからず松昌洋行にても昨年鐵道
 用材を引受けしが其の時期を後れしと寸法の見本に違ひ
 しに因り非常の困難に逢ひしも幸ひに信用を恢復し頗る
 前途に望あり支那人は本年日本より枕木十三萬本を輸入
 せり同洋行にても八萬本を輸入する計畫ありと云ふ
 廿七日 舟曉發し白河を下り塘汰に至つて荷物を積み午後
 六時過ぎ太浩タカを経て海に出つ前日白河口に入りしときは夜
 半睡眠中にありしを以て有名なる砲台を一望する能はざり
 しが今や歴々眼前に在り二つの大砲台河流を隔て、相對し
 一は東に面し一は南に面し敵艦の河口に入らんとするとき
 は雙方より十字火を發射するを得べし左岸にある者は高く
 して短く右岸にある者は低くして長く數町の間を連る雙方

再び芝罘に入る

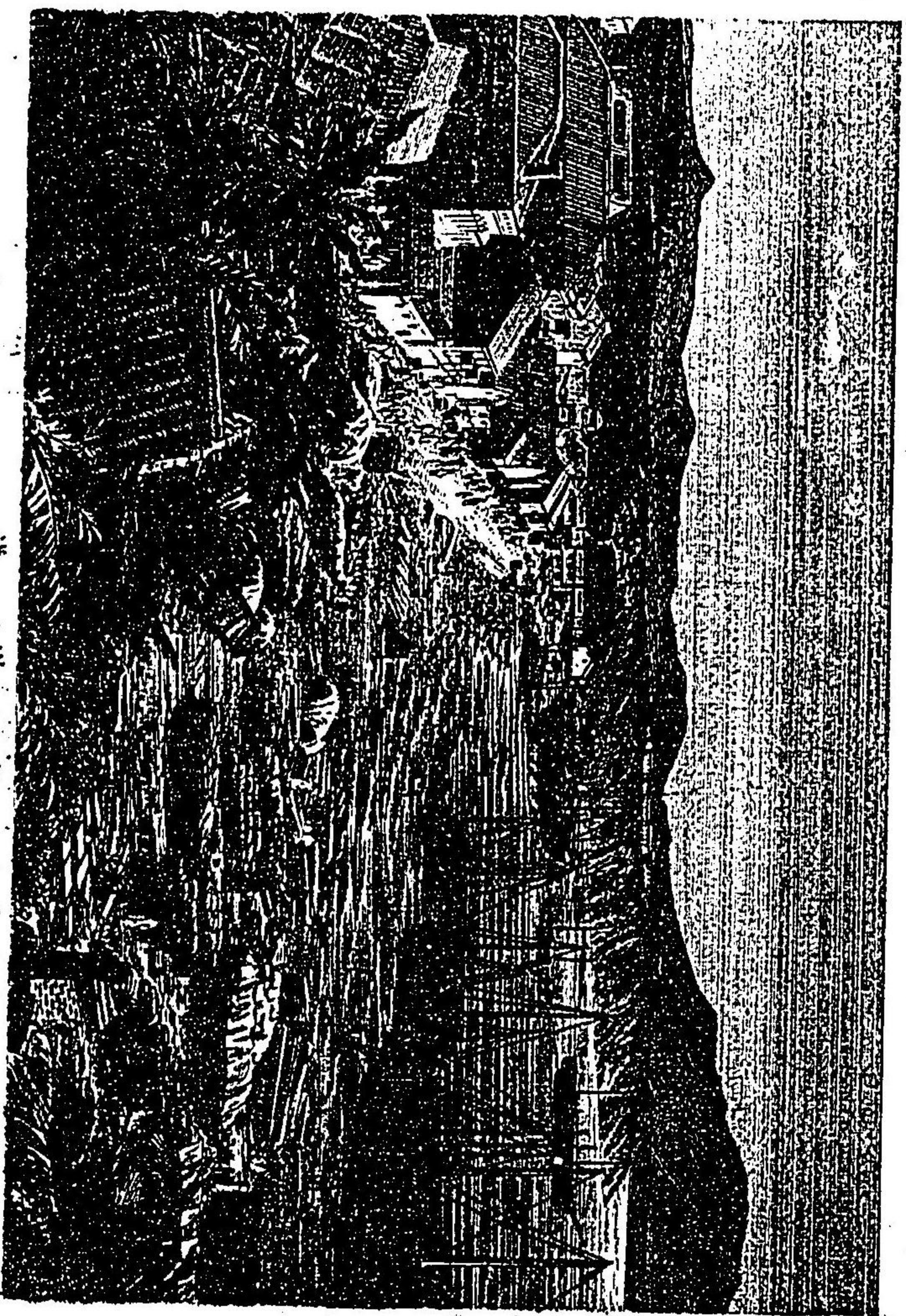
を合せ砲門は百以上あるならん汽船出入の困難なる白河に
 して此の大砲臺あり如何なる堅艦と雖とも容易に之に近く
 能はざるべきなり
 廿八日 天曇り風強く波荒く船掀舞して起立すべからず然
 れども余は天津に出でしより身体舊に復し健啖平生に異な
 らず午後二時過ぎ芝罘港に入る港内波高く上陸する能はず
 廿九日 天晴れて風未だ止まず日出前出錨す食堂に出るも
 の一二名に過ぎず
 三十日 曉起朝鮮の群島を望む風強けれども波濤太だ高か
 らず正午仁川港に達し上陸して再び旅館水月樓に投ず家屋
 清爽にして眺望佳絶なり一杯を命じ頓に連日航海の勞を忘
 る

再び仁川に入る

仁川の地形

九十六

十月一日より六日まで仁川港に在りて取調べものに従事す
此港は日本居留地各國居留地支那居留地の三區に分つ海岸
の斗出せし所に海關あり其の上の高丘に洋風及び支那風の
家屋あり是れを支那居留地とす之と相接續するを日本居留
地とす人家櫛比にして後高く前低く半は峻阪の上にあり海
岸は土地平坦にして港内の形勝を占め運輸往來極めて便利
なり我居留地の後を擁し左を扼するを各國居留地とす然れ
ども歐米人の在留するものは太だ僅少なるを以て日本人は
土地を買ひ又は借地をなして茲に移住し純然たる日本の市
街を成せり此區を出つれば朝鮮町にして其の入口に支那人
の商店あり朝鮮人の家屋は清潔と云ふべからざれども稍や
體裁をなし釜山鎮及び元山などは同日の論に非ず蓋し居



留地の盛大となるに従ひ諸方より新たに移住し一市街を成
せしを以てなり居留地の東に當り丘陵の海に臨むものあり
是れを日本公園とす園の中央に大神宮あり樹木の間に白壁
の隠見するは二つの料理店にて一を水明樓と云ひ一を明月
樓と云ふ俱に眺望に佳なり園の三方に日本墓地あり有名の
漢江は支那居留地の後を繞り迤透して海に入る仁川港と相
對し喚て響へんとするは月尾島なり周圍一里に過ぎず之と
相列んで海上に立つは小月尾島なり仁川の良港たるは此の
二島あるを以てなり然れども此の近傍は海潮の高低甚きを
以て満潮の時には一面蒼海となり千噸以上の大船も月尾島
を繞り近く海關の前に碇泊するを得へく退潮に及べば汀洲
處々に出て其間に一帶の漢江を現す是際に入航したる大船

は遠く小月尾島の外に止り舢舨をして屈曲する水流を廻り荷物船客の揚卸をなさしめざるべからず日本居留地の前にあたり一小嶋あり樹木鬱蒼として大に港内の風致を添ふ潮來れば蒼波渺茫として大船も其間を往來すべく潮退けば遠く陸上にある丘阜となり歩いて渉るを得べし潮水の進退するや最も迅速にして恰も海嘯の去來に異ならず是れ他の地方に於て稀に見る所なり此港に於る人口貿易等の現狀は青山好惠氏の筆に成る仁川の事情に詳かなり今一二の要件を同書より抄録せん在留人を國別となせば伊一人佛三人米四人英七人獨逸十三人清戸數四十一人口五百二十一女二十三(日本戸數三百五十人口二千二百八十三男千五百五十三女七百三十)其の多數を占むるは小商人と日雇人なり當港輸入

人口

品の重なる者は生金巾の類にして多くは英國及び其の屬地の産出に係れり然れども直接に貿易を爲すものは日支兩國人なり是まで輸出入とも我國にて多數を占めしが支那人の輸入年々に増加し遂に廿四年よりは我國を凌駕する勢となりたり輸出の重なる者は米大豆小豆牛皮の類にて支那の我國に及ばざる太だ遠し即ち明治廿四年に於て輸出三百九十九万四千八百八十八圓内日本一百四十二万六千四百六十三圓支那一百七十三万八千四十四圓同く輸出一百四十四万六千三百五十七圓内日本一百三十一万三百四十八圓支那十万三千二十九圓とす其餘は仁川事情に譲りて茲に掲載せず青山君は余が爲めに東道主人となつて京城に趣くことを約せしが朝鮮日報發兌の期に迫るを以て八日に非ざれば此の地を

辭すべからず然るに六日の夕に玄海丸入港し外務省通商局長原氏交際官試補長瀧氏を伴ふて渡來せり原氏は多年の舊知己なり因つて碼頭に至つて氏の上陸を迎へ手を握つて恙なきを賀し且入京の期日を問ふ原氏曰く明日なり因つて同行を約す元山の商人梶山氏防穀事件の總代たり釜山にて原氏と同船せり亦京城に趣かんとす京城に入るには水陸二路あり小瀛船に乗つて漢江を溯れば極めて安穩なれども我々は内地の摸樣を一見せんとするを以て陸に往き船にて歸ることに決す七日八時領事館に到り同行四人皆な轎子カゴに乗る余の轎子は藤の椅子に全ヒ足踏を設け二つの棒を挿み四人にて之を擔ぎ二人つゝ交代し一轎に付人足六人なり仁川より京城まで八里にして人足一人前三貫文餘なるを以て一轎

陸路韓城に趣く

毎に六圓を拂はざるべからず余は已に釜山及び元山に於て略ぼ村落の摸樣を實驗せり因つて豫め今日の行路にて見る所も同様ならんと想像せしが途中の宿驛とも云ふべき村落は稍々清潔にして夫の汚物の路上に流るゝを見ること太だ稀れなり土地平坦にして車を馳するを得べく險阻なる者は九峴と云ふ一小山あるに過ぎず是れ亦少く迂回すれば溪間に平地あり故に京城仁川間に鐵道を造らんとすれば漢江の架橋を除き其の他の工事は太だ容易ならん蓋し此の道路は金玉均の盛時に當り自ら監督して造りしものにて馬車を通ずる計畫に出づ近來まで二輛の人力車ありて梁山と仁川の間を往來せしが賃錢の高さが爲め旅客は多く水路を取り且つ道路に破損ありて修繕を爲さざるを以て遂に休業せり轎

桐柳洞

夫は二三里を往き立場に到れば轎を卸し濁酒を飲む孰れ
 地にても同様なりと云ふ正午桐柳洞に達す即ち中央の一小
 驛にして日本人の旅店あり其の店主は老婦人にして對州よ
 り來れりと一僕を使用す亦日本人なり羅馬字にて書したる
 「ラフ」を倒に掛く笑ふべきなり行厨を開き且つ明大(咸鏡道
 より出る乾魚なり)を煮せしめて之を食ひ再び轎に乗る沿道
 の稻田已に熟し孰れも豊作の模様なり畑には大根蕪の類を
 種へ一望青々の間に唐辛の紅色を成すを見る蓋し朝鮮人は
 酷だ唐辛を嗜み魚なり野菜なり之を煮るには必ず唐辛を和
 す故に盛んに之を培養し即今成熟の時季なるを以て往々之
 を摘んで屋根の上に乾かせり途上往々墓地又は高丘の上に
 紅氈を敷きしが如き處あり望遠鏡を把つて之を望めば皆な

漢江

唐辛なり一小河あり轎夫草鞋を脱し裳を掲げ輿を擔きなが
 ら渡る水深くして膝を没す蓋し漢江の支流なり此より白砂
 數里に連り皚々雪の如し原君後れて至り笑つて曰く迹より
 して一行を見れば更に神葬の行列に異ならずと轎夫の白衣
 を着くしたる有様は大に我國の白丁に似たるを以てなり正
 面にあたり巉巖峭立して天に聳ゆるを見る即ち有名の北漢
 山なり小舟に乗つて漢江を渡る川幅二町計り水深くして碧
 色藍の如し對岸は即ち梁山にて亦一の小都會なり道路汚穢
 にして臭氣鼻を撲つ公使館書記生國分氏原氏の一行を迎へ
 て此處に在り市街を出づれば官道の兩側に柳を植へ頗る風
 色に富む更に往く一里餘京城の入口に達すれば道路狹隘に
 して兩側の人家は豚小屋の如く糞汁溝中に流れ人をして其

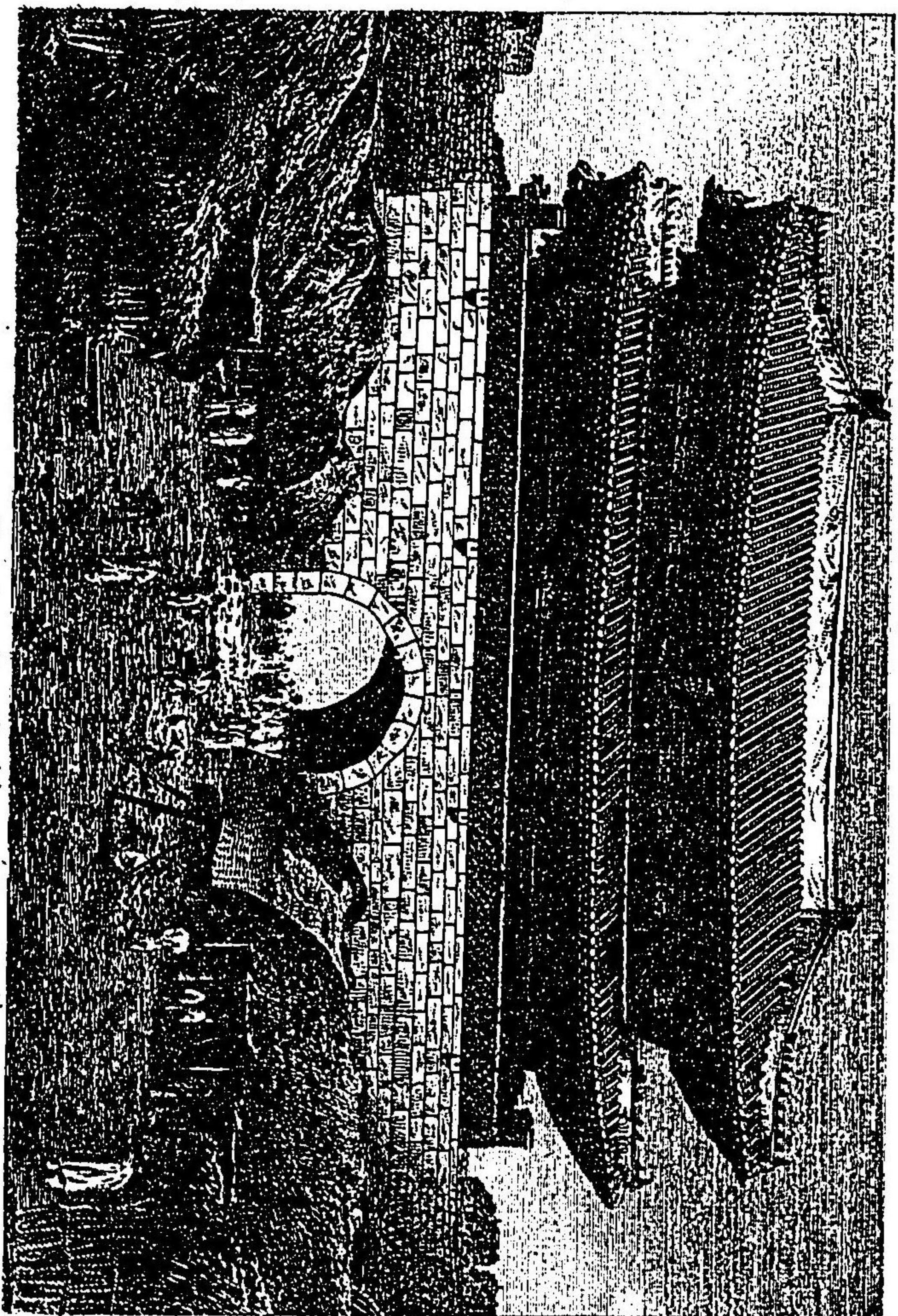
京城に入る

の不愉快に堪へざらしむ朝鮮より歸りしもの、口を極めて京城の汚穢なるを説くは亦故なきにあらざるなり原長瀧の二君は公使館に趣き余は梶山子と俱に荻園(山内)に投ず即ち料理屋兼帯の旅館なり夜に入り絃聲歌聲隣房に起り人をして快寝を爲す能はざらしむ

余は十日間京城に滞留せり今見聞せし事件を各題に分ちて之を記載すべし

國王の巡行

國王の巡幸 衣冠列を成し旌旗風に颯り鹵簿の長さ數里の間に列る人をして一千年以前なる我平安朝の有様を目前に視るの想あらしむる者は國王の行幸なり十月十日國王の大禮を備へて揚州綏陵(三代前の國王翼宗の廟なり)に行幸せらる、とき前夜より全宿の人々と拜觀を約す此日未明遙に入



門大南夷赤

聲の大路に喧きを聞き起つて門を出づれば紅日未だ登らず
已に往來の繽紛たるを見る水標橋を渡り鐘路に到る即ち宮
闕より東大門に出づる漢城第一等の大路にて其の廣さ東京
銀座通り位なり此處は平時両側に露店を出し頗ぶる汚穢な
れども今日は尽く之を取除きたり來觀人已に路上に充満す
朝鮮平民の着する所は白衣白裳なるを以て一望白鷺の群を
成すに異ならず其間に青色又は紅色の衣を頭上に掛け僅か
に両眼のみを現はしたるは中等社會の婦人なり常に深閨中
に閉鎖せらるゝ貴婦人方も多く拜觀に出掛くれども窓に紗
を張りし轎に乗るを以て面貌を見るを得ず我々は醫師古城
氏の出張所に入りて休息す程なく先發官吏續々經過す孰れ
も美麗の禮服を着し文官は轎に乗り武官は騎馬なり我々が

休息所の前に當り四本の丸木を立て蓋ふに布の幕を以てす蓋し其の西に當り先廟あり殿下の此處より遙拜せらるゝが爲めなり堂上官(我國の勅任に當る)は此處を過ぎ歩行せざるべからずいづれも青色の雲紋紗を着し背に金絲にて鳳凰又は獅子虎の類を縫箔し頭に烏紗帽を戴く其衣冠たる繪に書きたる「天神様」に異ならず武官に至つては細き弓を携へ五つの白羽矢を挿める矢筒を負ひ金銀作りの環刀を帯び神社にて目撃する「矢大臣」の像に彷彿たり我々が目撃して奇怪の感を起こしは佩刀の櫛を後にし鞆を前にするにあり又自ら馬を驅るものある無く一人前に立て手綱を曳き白衣の下人兩側に従ふ其の身分の高下に因り人員に多少あり而して糾糾たる武官すら兩手を鞍に掛け憚々として墜落を畏るゝの狀

あり其の馬を下りて歩行するや下人は左右より之を扶けて肩を持ち手を曳き其身は殆んど衣に堪へざるものゝ如し宮内官の先發するもの次第に多し一様に紅衣を着し孔雀の尾を挿みし峨冠を戴く已にして路の中央に少許の沙を撒く即ち道を清むるなり程なく喇叭の聲あり國王の出關を知る第一番に清道と書したる大旗を左右に押立て虎又は蛇等を繪きし紅旒青旗相列して其の幾十なるを知らず之に次ぎ喇叭を吹き綠色木綿の窄袖衣を着したる兵隊スナイドル銃を肩にし二人づゝ相列び三線を成して進み來る即ち洋式によつて訓練せらるゝ經理應兵士なり其數百五十人ばかりなるべし之に次ぎ砲車來り舊式の兵隊鎗の生せし偃月刀三枝鎗等を押立て其鋒先のヒョコ／＼動くものあり恰も田舎の御祭

を見るの想あり其の後に従ふは騎兵なり其の馬は小轎の如し舊式の音楽隊四組あり孰も馬上にて鉦鼓等を携ふ次に來るは前と全く洋式の兵隊三百人ばかり中央に矢大臣然として矢筒を負ひ馬上にあるものは威權赫奕たる閔泳駿なり紫色の帛に統衛司令及び經理と金書したる二旒の旗を手にす以上を前軍とす此の行列に雜り火繩銃を荷へる兵隊も其數を知らず兵隊の前後には棍棒を手にするもの續々相接し又板にて造れる「ヘラ」の如き物を持ち朝鮮人の道傍に立ち鹵簿の妨となるものあれば男女を論せず之を毆打す已にして又た一隊の兵隊あり夫より大旗來り赤衣の宮内官其數を知らず大轎二つあり數十人の轎夫之を擔ふ國王は許多の文武官を左右前後に従へ赤蓋の下に立ち美々敷裝ひたる白馬に乗

り御衣は軍服にて青地に金色の模様あり両袖は紅にして背に大なる虎を繡す金刀を帯び烏紗帽を戴き天幕の中に来りて馬を下らる群臣皆な下乗し兵隊四方より圍繞して敬禮す國王は其處に設けたる段上に立ち髭を捻りながら四方を顧み欣然の色あり頻に侍臣に向ふて何やらん命令し給ふ御齡は四十前後なるべし顔色白皙にして温和の氣眉宇の間に現る程なく轎に召し給へば一同オーの聲を揚げ樂を唱へて運動を始む新式舊式の兵隊及び砲車數輛其の後に従ひ防禦大將李鍾健紫旗を手にし數百の兵隊に圍繞せられて進行す之を後軍とす姑く在て再び各色の旗旛來り兵隊來り砲車來り其の鹵簿は前と大同小異なり之を世子の行列とす鹵簿の全く経過するまでに殆ど二時間を要せり而して夫の天神樣然

たり矢大臣然たるものは幾百人なるを知らず文武官の多き驚くべきものあり殊に余の注目を引きしは文武官の一人にして少くとも三四人以上の下人を従ふに在り且つ先發の文官を除けば孰れも小犢否な馬に騎らざるはなし聞く此日家に乗馬なきものは人を四方に馳せ田舎の荷馬を取押へ其持主をして綱を曳かしめ一も賃銀を與へずと美々しき函簿中に許多の疲馬あり糞桶を戴せしことありと思はる、古鞍の上に盛装したる官員を置き田舎百姓が油紙にて包みし笠を戴きスハハ／＼烟草を吸ひ乍ら之を曳て來るを見しは此が爲めなり蓋し國王の行幸を一見して朝鮮の形勢を探究する參考に拱すべきものあり公平に之を論ずれば此國は五百年前より古禮古典を傳へ文化の視るべき者あり患ふる所は文弱

大院君に謁
見す

に流れ更に活氣なきに在り其狀たる平安朝の末路と同一なり翌日余は大院君に謁見し告げて曰く昨日國王殿下の行幸を視る純然たる唐明の遺風なり人をして千年前に於る日本の有様を追想せしむ大院君不豫の色あり曰く然るか余は馬匹の太だ小にして騎兵の用を爲さざるを知ると余は此の一語を聞いて大院君の七十以上の老年に達し乍ら壯心未だ衰へず虚禮の無用なるを慨歎するの意あることを知れり
大院君に謁見す 杉村領事の紹介に因り第一國立銀行の川久保氏を通辨に頼み青山好惠氏は余に後る、二日京城に來れりを伴ふて大院君に謁見せり其の邸を雲峴宮と云ふ汚穢なる入家に接すれども結構頗る大く門の左右に長屋あり前門を過ぎ中門に至れば數名の番人あり紹介狀と名狀を出

だし待つ稍々久し一人出で來りて案内す門に入りて左折す
 れば堂あり黒帽を戴き青帛に摸樣ある服を着し氣品高尚に
 して年齢六十内外の老人様側に立てり川久保氏に向ひ何人
 ぞと問へば即ち大院君なり大院君は本年七十四歳なるに少
 しも老衰の體なし余の誤りて他人となせしは亦故なきに非
 ざるなり我々の様に腰を掛け履を脱するを視て笑つて曰く
 朝鮮に來るものは堂に入らんとして先づ履を脱するを迷惑
 に思ふならんと我々を導て一室に入る正面に壽酌樓と太書
 したる額あり室の廣さ幅二間長さ五間許り床に絨氈を敷き
 左右に數脚の支那椅子を置く君は余を中央の椅子に倚らし
 めて自ら相對す坐に一人の侍者なし給仕を呼んで茶を供せ
 しめ先づ杉村氏の紹介狀を披て之を讀み自ら筆を執つて答

文を草し之を川久保氏に付す已にして刺を投ずる者あり公
 使館員國分氏なり君の右側に侍す談話稍々熟す余は漫遊中
 の詩稿を出して教を請ふ君高かに一二首を吟し國分氏に向
 て曰く詩篇太だ妙なり日本に於て有名の士ならんと已にし
 て金角港上の長篇を讀み半に至り眼鏡の上よりコロリと余
 の顔を睨み又讀み又睨み小聲にて國分氏に問ふて曰く彼の
 人は恐るべき人物に非ざるか國分氏曰く然らむと蓋し此の
 長篇には頗る激越の音調あるを以て之を疑ひしならん一の
 古印を出して示さる篆字にて如南山之壽の五字を刻み揚修
 作銅雀主人珍藏とあり蓋し魏の曹操の印章なり前の高麗の
 世に當り開城の井中より出で今の王家に傳はりし者なりと
 云ふ君余の號を問ふ曰く鐵腸なり驚て曰く奇号なり何ぞ收

めて底柱となさるるや蓋し朝鮮昔の相似るを以て戯れしならん稍々ありて笑つて曰く余も今より号を改めて鐵漢とさん漢とは彼奴キヤツと云ふ意味なりと筆を把り箋紙に

百鍊此身成鐵漢 三緘其口是金人

の二句を書して示さる明の女史錢蓮因の其夫を戒る一箴の下句あり坐上を睨視して曰く余は國家の多難に際會し遂に欺て中國に護送せられ多年異郷の天にあり鐵漢とならざらんと欲するも得べけんやと余は此の二句を大紙に書して賜はらんことを請ふ君首を掉つて曰く一の坐輿のみ且天暮んとして眼矇す老人を責むる勿れ余は時世の談をなさんとすれども君は之を避けて口を開かず蓋し談するを欲せざるに非ず閩家の頻りに問者を用いて君の一言一行をも視察する

により故に嫌を避けらる、ならん然れども文祿の役に日本兵が歴代の宗廟を發きしと前年清國の君を捕へて幽閉せし事は時々口頭に迸れり談話數刻に渉る余は老體の疲勞あらんことを恐れ辭し去らんとす君許さず曰く鐵漢鐵腸に對す何ぞ疲る、ことあらんやと遂に再ひ席を進め點燈前に至れり翌日川久保氏に宛て余の詩稿に添へて手筆の書簡を贈らる

昨枉鐵腸居士四州少年指青山氏爲平安歸館夜是和吉入寢否爲探兩公起居之夜○一字不分明又送鐵腸瓊什茲以書報大約此翁文章真是長杠巨筆也如我老拙可走望洋匆匆書不成儀

老石道人手具

君軀幹長大にして容貌魁偉而して動作言語とも磊々落々たり時に固陋の言なきに非ずと雖ども一見して非凡の人物たるを知るべし權を私門に弄すと閔黨の深く之を憚る者は亦故なきに非ざるなり

遺聞三件

遺聞三件 大院君文祿の後に日本兵の乱暴を極めしことを語り而して曰く我兵の小西行長を斃せしを以て少く宗廟を辱かしめられたる憤を洩すに足れりと余怪んで曰く小西は軍を全ふして日本に歸り其後關ヶ原の役に破れて斬首せらる何ぞ屍を此國に暴らせしことあらんや大院君首を掉つて曰く否なく、全羅道の某所君は地名をも指されたれども記隠せず(に)碑石ありて今に存せり一兵士の小西を殺せしを記する太だ詳かなりと余は再ひ其の妄を辨んじたれども大

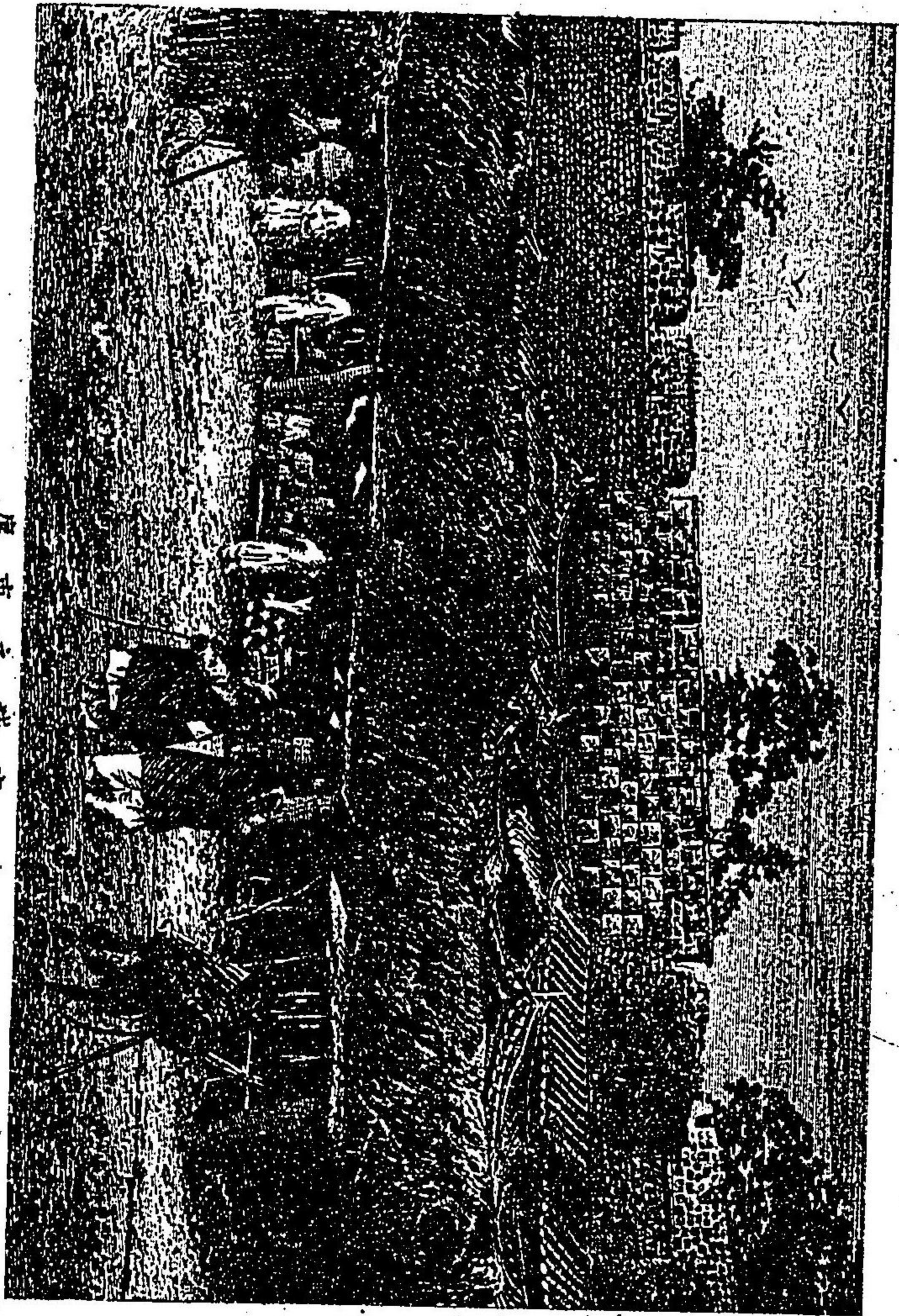
院君は固く執つて疑はざるなり川久保氏の談に某地の戦に韓兵の小西某を斃せしことあり之を誤り傳へて行長なりとし今に至りても之を信するもの多しと是れ一つの遺聞なり前年鹿兒島の士人あり大院君に謁見し談文祿の役に及ぶ士人曰く某は島津氏の臣下なりしと大院君忽ち顔色を變し再ひ語を交へざりしと余は杉村領事に聞けり新塞の大勝に因り石曼子ソノの威名明韓二國に震ひしことは當時の歴史に見ゆ此の一事に就ても三百年前を追想するに足れり是れ亦一の遺聞なり余の出發に際し別を副島伯に告く伯曰く根來寺の秀吉のために滅せらる、や僧兵三千逃れて朝鮮に趣き文祿の役起るに及ひ韓兵の先鋒となり各處に戦争し功積最も多かりしを以て一の村落を分與せられ今に其子孫の存するも

の千餘口なりと朝鮮に至り之を問へども知るものなし然るに前日京城在留の某氏之と相似たることを聞き出せり忠清道の沃川邑に日本村あり戸數四五十人口四百餘皆な文祿の役に朝鮮の爲めに戦ひしもの、子孫なり當時の事は委く壬辰錄に載せり然れども是れまで此事を日本人に洩すことを嚴禁せりと壬辰錄は朝鮮の諺文にて書きしものなり余は京城中處々の書肆に就いて之を尋ねしかと遂に其書を見出す能はざりしなり歸朝後金玉均氏に逢ひ此事を談せしに氏の曰く日本村は決して一の沃川に止まらず長き戦争中日本人の朝鮮に降参して功を戰場に立てしもの少なからず乱後朝鮮政府より土地を受け其の子孫は今日まで相集て處々に部落をなすと是れ亦一の遺聞なり

京城の形勝
并に市街の
有様

京城の形勝并に市街の有様 林武一氏の朝鮮案内に京城の模様を記する頗る詳明なり請ふ其の一節を綏萃し并せて余の見聞せし所を述べん京城は北に白岳山南に木覓山東に駱駝山天藏山及び拜峯山西に仁王山白蓮山及び蓮華山あり又遙に北漢の三角山を望み山脉皆な相通ず城の四方には牆壁を繞らし長さ我が四里十五町十八間餘高さ平均十尺あり南に崇禮門南大門北に肅靖門北大門東に興仁門東大門西に敦義門西大門東北に惠化門西北に彰義門東南に光熙門西南に照義門あり就中興仁門最も大にして高壁門の外方を包む各門の構造は切石を積み穹隆形を成し上に層樓を置き鐵を以て門扉を包む此城郭は今より五百年前太祖の經營せし所にして規模頗る廣大なり高きに登つて望めば牆壁蜿蜒々として

谷を越へ山に通り四方を圍繞す門樓の高さに至つて我國の城門に於て之と比較するを得べきものなし市街の廣さは東西凡ろ三十丁南北凡ろ二十丁にして其の四分の一は新舊大關各官衙并に王族名族の邸宅なり右の如く記載すれば頗る都會の體裁を成すもの、如くに思はるれども其の家屋の粗未なる實に我々の意想外に出づ名族の邸宅中には廣大なるもの少なからず而して中央の大市場とも云ふべき鐘路には瓦を葺きし層樓なきに非ざれども其餘は概ね粗末千萬なる藁葺にして滿城一望貧村の有様を爲せり其間にあつて家屋の體裁を爲すものは支那人の市廛に過ぎず其の道路の汚穢なるに至つて何人も之を描寫するに苦むなるべし前年某氏朝鮮より歸り余に語るに漢城の市街は人糞積堆し足を容る



漢城の市街

京城の汚穢

、の場所なし故に外に出るときは轎を用ひざるべからずと云へり是は稍や誇大に過ぐ夫の鐘路を始め南大門より東大門に至る大通の如き道幅廣くして相應なる家屋あり尤も平時は両側に茅葺きの小屋を構へて市を成し我國に於る田舎の市場に彷彿たれども往來雜沓し砂塵の紛起する外には太しき汚穢を見ず其の臭氣の紛々たるは邸宅ある場所に非ざれば市廛の稀疎なる道筋なり邸宅には概ね門の左右に雪隠を設け其底に穴を鑿ち大小便をして道傍の溝に落ちしむる仕掛なるを以て其處を通過する毎に黄金水の滑かに流出するを見る故に溝上に充満するものは過半大小便なり朝鮮人は沙塵を防ぐ爲め此水を酌んで路上に撒く臭氣の甚しき亦宜なり且つ一たび横筋に入れば糞塔路傍に積載して糞々た

り余は幸にして秋涼を以て漢城に入れり盛夏炎熱の時ならば果して如何ばかりの不愉快を感ずべきを知らざるなり我が居留地の入口より鐘路に趣く途中に溝あり水深さ二三寸許りなるべし之に臨める多くの邸宅より汚物を流瀉し且つ人糞泥上に堆を成せり然るに其の下流に於て許多の婦女が衣裳を此水に浸し頻りに杵を以て之を搗くを見受けしとあり聞く盛夏に於て此水に就て體を洗ふもの少なからずと韓人の汚穢を感せざる殆ど豚に異ならざるなり余は外出する毎に香水を手巾に注ぎ之を以て鼻を掩ひしが久しく京城にあるものは笑て曰く臭氣を覺ゆる様にては朝鮮通と云ふべからずと蓋し然らん

官妓

官妓 朝鮮には藝娼妓の類頗る多し其の上等なるものを官

妓と云ふ即ち宮中に隸属する妓女にして大禮ある毎に之に列す古の所謂女樂の類ならん我々は大三輪氏の宅に於て其の歌を聽き其の舞を観るとを得たり大三輪氏は朝鮮政府に聘せられて新貨幣鑄造の事に任し京城に駐在す一夕原氏の一行及び公使館領事館員を招て宴會を開き余も其の席に列せり朝鮮人の賓客は典圖局幫辦富平府使安駟壽氏なり此の日六時より宴會を開く筈なりしが近日宮中の大禮あり其の儀式を習ふが爲めに京城の官妓一同参内し退出の遅くなりしとて八時過ぎに至りて五名前後に來會せり孰れも十七八の妙齡にて二十を越せしと思はるゝは一名に過ぎず蓋し二十一二ともなれば廢業するを以て常となすと云ふ薄毛を抜て額を丸くし巧に白粉を施し髪は頭の中央にて分け後に垂

らし襟の處にて之を束ね黄金又は大きな紅珊瑚等の簪を挿む袴を着し衣短かくして僅かに乳の上に達す衣の色には青あり碧あり淡紅あり孰れも上等の支那帛を以て之を製す賓客の間に坐して各自に放談し机上にある紙巻葉卷の烟草を取りて之を吸ひ同時に數本を袖中に入る故に妓女數名の爲めに一箱の「シガレ」も一夕にして尽ると云ふ已にして音樂起る伶人四名にて笛二つ長鼓一つ胡弓の如きもの一つを合奏す妓女相列び膝を立て乍ら歌ふ音樂瀏亮として耳を澄し而して歌聲金石の如く所謂雲を停め塵を飛ばすの妙あり夫れより舞踊となる第一は女樂なり二女両手を張つて徐々と行違ふ此の如きもの幾十回なるを知らず少も變化なし余は戯れに之を名けて十字架の御化けと云へり次は男樂なり

一人は男裝し一人は女裝す其の両手を張ること前に異ならず只だ時々相ひ抱き男裝者の兩袖を以て女裝者の顔を掩ふあるのみ舞長くして且遅く人をして厭倦に堪へざらしむ最後は劔舞なり兩女小矛を執つて對舞し音樂も次第に激越となり始めて睡眠を覺せり已にして膳羞出づ魚菜肉を始め餅強飯の類を高く鉢に盛りて几上に置く料理の進歩せる決して支那に譲らざるなり妓女聲を合せ酒を勸むる歌を謠ひ夫より片足を立て酌をし乍ら箸を執つて肴を喰ふ餓虎の肉を争ふに異ならず其の健啖なる驚くべし夜深け宴散す底中に轎車あるを見る即ち妓女の乗つて家に歸る所のものなり或る書に官妓を以て傾城と同一の様に記すれども是れは誤れり傾城と云ふは普通我が國の藝者の如き者にて宮中に伺候

するを得ず而して最も奇怪なるは夫ある者に非ざれば傾城となり娼奴となるを許さず其の良人は箱屋を兼ね細君の外に宿する時は翌朝自ら來り迎へ客と應對して其の玉代を受取る云ふ實に奇々怪々の至りなり

十月十九日に瀛船豐嶋丸仁川を發し釜山より馬關神戸に直航するを以て之に乗つて歸朝せんとし且つ仁川の諸紳士が余の爲めに懇親會を開くに決せし由を余に先きたつて歸港せし青山氏より報知し來りたれば遂に十七日を以て京城を去るに決す然るに原長瀧の二氏も公用の都合により急に歸朝すること、なりしを以て再び同行を約す此日昧爽に起て行装を整へ待つ稍や久し二氏を始め公使領事以下送客數十名皆な來つて門前にあり七時半轎子に乗り泥峴を出て南大

京城を發す

門を過て梁山に向ふ原君の轎は其形神輿の如し蓋し朝鮮に於て貴官の乗る所のものなり且つ原君と長瀧君の傍には一名つゝ巡査の隨行あり而して一轎飄然と其の迹に従ふ路傍見る者のは余を認めて僕従となせしならん余は前日より風邪に冒されて鼻の感を失へり此時早朝なるを以路上の汚物殊に多し余は二君を呼び戯れて曰く目に汚物を見るも鼻に臭氣を感せず深く風邪に謝せざるべからずと二君絶倒せり梁山に至れば小瀛船頻りに笛を鳴らして我々一行の來るを待つもの、如し漢江を往來する瀛船二つあり一は日本人一は獨逸人の所有に係る俱に朝鮮人の名前を以て營業す而して船長以下水夫まで皆な日本人なり此處より仁川まで陸路八里に過ぎざれども江流迂回して二十七里あり然るに潮の

漢江の船中

進むが毎に梁山の水流までも漲溢し其の退くに及べば沙洲
 出で舟を膠するに至る故に漑船は潮を量て進退せざるべか
 らず今や岸上の潮痕已に三尺を過ぐ蓋し出發の稍々後れし
 を以てなり流に従ふて下る河幅廣き所は五六町もあるべく
 兩岸山嶺出沒し風色頗る奇なり然れども余は風邪の爲め久
 しく甲板上に立つ能はず且つ昨夜深更迄來客あり今朝曉を
 冒して起さしを以て頻に睡を催ふし室内に臥す已にして告
 ぐるものあり曰く江華島に近きしと驚て甲板に出で眺望す
 山頂處々に砲臺あり遠近相對し其の幾十なるを知らず岸上
 又は山腹を逶迤して胸壁を築く我々が目撃せし所のみを以
 てするも六七里の間に連なれり要衝の地に於て島と相對し
 岸上に胸壁あり遠く高山の頂に達し處々に門を設く大樓あり

江華島の城
壁

り屹立す望遠鏡を把て之を望めば伏波樓の三大字隱々とし
 て辨すべし對岸にも高樓あり鎮海樓と書したる額を掲ぐ蓋
 し漢江の水營なりしならん古來より江華島を以て國王の避
 難處と定め山中に離宮を置き處々に兵營あり然るに大院君
 の盛時に至り海防の爲めに四方に胸壁及び砲臺を造り大砲
 を鑄て之に備へり前年佛米二國の軍艦漢江を遡つて沙に膠
 し砲撃に逢ふて敗走せり砲臺胸壁は孰も煉瓦にして其の品
 質の粗惡なるに因り今日は過般壞圯し且つ其構造たる最初
 より十分に實用を爲さざるにもせよ貧弱の朝鮮にして此の
 大工事を起せしは驚くべきとて亦以て一時大院君の威權
 の盛んなりしを見るべきなり薄暮仁川に達す此夜在留の諸
 紳士余の爲めに懇親會を水神の樓上に開く會するもの四十

懇親會

餘入西脇長太郎を始め仁川海關平生凱三郎氏等の演説あり
 余は浦潮の事情芝罘天津の商況并朝鮮諸港に於て見聞せし
 事件に就て意見を述べ殆んど一時半の長きに涉り朝鮮の貿
 易を擴張する方略として對韓政略を一定し内國人に成るべ
 く朝鮮の事情を知らしめ内國の資本を注入し并に航海を保
 護する方針を一變することを以て結論とす諸紳士は孰も拍
 手して余の意見を賛成せり
 瀛船出發を延ばせしを以て更に數日仁川に滞留し廿一日午
 後五時原長瀧の二氏と瀛船豊島丸に乗り廿三日午前釜山に
 達し翌日薄暮發錨し廿五日の昧爽に馬關に着し廿六日午前
 十一時神戸港に入る此の行や八月十四日東京を出でしより
 七十餘日を費し釜山元山を経て浦潮に趣き滞留半月餘更に

歸着

元山釜山仁川を過ぎて芝罘天津に遊び再び黃海を渡り仁川
 より京城に入り夫れより歸路に就き前後海路四千四百六十
 餘里を往復せり亦一時の快遊なり

北征錄畢

批點係三袖
海張氏

次洲曰意氣
凌空酷肖
遺山

青洋曰前聯
雋絕

次洲曰筆力
勁健辭意悲
壯直逼三韓
蘇

北遊草

壬辰八月將遊於西比利亞及清韓二國賦此
留別都門諸子

又駕長風萬里舟。不知壯志幾時休。北辰影漾黑龍
浪。朔雁聲寒黃海秋。月黑林中聞虎嘯。風腥波上見
鯨浮。功名未就頭將白。男子耻爲升斗謀。

登釜山古城

曠原亘數里。一山突峻崢嶸。薄暮獨下馬。崎嶇歷榛荆。
牆壁半頽圯。蔓草斷碑橫。剔藓讀題字。知是釜山城。
緬懷小西公。揮劍叱長鯨。艤幢連絕海。夕風捲飛旌。

韓兵群羊耳。敢與猛虎爭。暗啞屋瓦震。堅城一夕傾。
長驅入平壤。豪膽吞朱明。惜被豎子誤。中途俄息兵。
不然高勾麗。於今屬東瀛。功過互相償。千載有公評。
低徊不能去。百感胷中盈。秋風撼林木。猶疑鼓鼙聲。

元山

樓臺隱見水雲間。群島周圍碧一灣。鄉國遙々千里外。秋風落日入元山。

金角港上有感賦長歌

北溟巨鯤掉其尾。海水壁立三千里。鱗介羽族盡奔竄。化爲大鵬將南徙。金角港臨黑龍灣。四山繞海碧

青洋曰蒼蒼鬱勃無一懈筆有二三江河滔々一瀉千里之狀

衣洲曰一瀉千里如黃河決隄而下悲壯沈鬱是居士本色

灣環。丘阜奔騰起忽伏。人家數千依其間。營壘艦廠屹對立。砲台相望山復山。桅檣林立鷺旗颺。鷄首如山吐咽。鯉君不見圖南宏謨始。彼得子孫繼承無或息。霸氣鬱勃壓全歐。更向東方張左翼。憑陵已據形勝地。攻守籌策尤努力。千手揮槌海若驚。巖壁崩落日色黑。方鑿大萬里。移山又填海。欲使東瀛通朔北。鐵路七千。太息隣人味遠圖。群羊偃臥猛虎側。莫嘆渠逞吞噬志。自古弱肉供強食。港上八月冷秋風。灑氣肅殺雁橫空。東望日本青一髮。鯨波捲天雲濛々。善隣方畧須計畫。外禦其侮難伺隙。建國有道重自

強時機一失車脫軌。

四

去海參威日贈八代大尉々々將遊於唐太及

黑龍江

一劍橫海追飛鴻。霜風獵々吹枯蓬。金角港上共握手。杯酒半月相過從。祖帳宴酣拔劍舞。笑指海上雲千重。敢辭風雪阻行路。朔北奇勝在嚴冬。風捲雁陣客衣冷。北斗倒影黑龍江。群狗曳橈渡冰海。滕六降雪漫長空。穹廬投宿無枕席。胡人相語聲紛咄。寒林風起狐兔竄。血痕狼藉留虎蹤。豪氣鬱勃不可抑。酌酒頻澆磊塊骨。驅馬欲上興安嶺。聳天積翠如劍鋒。

次洲曰鬱勃
發露而有緒
一種友愛之
情是為離
獲

東俄地勢殷勤閱。江山萬里羅胷中。他年殺氣蔽東海。有人談笑堪折衝。吾將今日去此地。西搜禹域東箕封。勿言一別各天遠。歸來京洛期再逢。三國形勢供抵掌。書堂夜話燈影紅。

再入釜山

萬里長風送客舟。浩歌仗劍北溟秋。無端今日鄉情動。雁外青螺是對州。

龍尾山謁藤肥州祠

加藤來。加藤來。老翁倉皇兒啼止。餘威至今如轟雷。一夜又將軍猛於虎。韓兵犬羊何足數。馬蹄蹂躪八道

五

青萍曰宛然
咏史樂府山
陽老翁不
能擅美于
前

中。有。如。摧。枯。揮。利。斧。乘。人。不。意。博。奇。功。一。笑。小。西。真。
賈。豎。我。向。咸。鏡。試。盤。錯。開。城。平。壤。任。汝。取。窮。逐。竟。獲。
兩。鳳。雛。置。之。陣。中。親。安。撫。嗟。爾。韓。民。勿。股。栗。我。非。夜。
又。却。是。佛。南。無。妙。法。蓮。華。經。旌。旗。翻。風。々。蕭。瑟。小。奴。
敢。抗。老。大。官。紛。々。投。戈。膝。盡。屈。百。年。廟。食。熊。本。城。又。
向。海。外。留。英。靈。高。阜。臨。海。小。祠。在。云。公。此。處。曾。建。旌。
時。維。壬。辰。秋。八。月。海。氣。慘。澹。飛。鴻。沒。夕。陽。下。馬。祠。前。
拜。懷。公。威。烈。森。毛。髮。君。不。見。釜。山。城。上。有。古。碑。文。字。
樸。質。無。浮。詞。不。說。倭。兵。廿。萬。渡。海。去。只。云。秀。吉。死。而。
加。藤。歸。釜山城有經紀大中亟萬公碑閣重修記崇
禎戊寅知府朴綺奇所撰記中有此一語

青萍曰經遠
秀澹與子
成天草詩
風神髣髴

入。太。沽。灣。晚。潮。退。船。不。得。進。遂。泊。海。上。
夕。陽。將。沒。海。色。黃。大。魚。鬣。浪。雲。渺。茫。舟。人。指。點。大。陸。
近。幾。群。小。鳥。檣。上。翔。遙。空。無。物。遮。我。眼。料。知。平。野。連。
天。長。艤。舟。沙。上。待。汐。到。隔。烟。太。沽。空。相。望。海。心。無。月。
天。闇。黑。北。斗。照。水。燦。光。芒。

白河船中

白。河。之。水。何。蜿。蜒。九。十。九。曲。灣。復。灣。蘆。岸。已。過。沙。岸。
出。水。波。拍。々。船。盤。旋。寥。花。深。處。繫。小。艇。人。家。住。在。楊。
柳。間。不。知。天。津。在。何。處。日。低。平。野。青。連。天。中。流。回。顧。
來。時。路。蒲。帆。幾。片。林。梢。懸。

次洲曰王摩
詰詩中有
嵩殆指此

天津客舍臥病

身如落葉任風飄。耿耿中霄酒易消。隔院絃歌添感慨。照牀燈火伴蕭寥。飛鴻唳月塞雲冷。積水浸天鄉國遙。咫尺燕都何日到。無端客夢趁歸潮。

渤海船中遇大風浪

積水蒼茫浸夕暉。滄溟不見片帆歸。風翻雪浪奇峰起。潮拍玻璃驟雨飛。但駭砲車如電掣。誰知海若太神威。絃頭忽聽歡聲湧。隱約雲間認翠微。

泊芝罘

濤聲如急雨。澎湃幾驚眠。雲黑疑無月。燈明知有船。

青萍曰造語似少陵而差生新者

絃歌思古俗。此地古魯國也。於今風俗純樸。烽火記當年。明季倭寇屢侵山東。歸路烟波渺。淹留渤海天。

仁川

潮落長汀十里長。人家斷續水雲鄉。朝來峨艦經過處。只見平沙映夕陽。

往夢只須問海鷗。看來世事幾沈浮。雲開月尾青螺現。潮退江華白練流。鷁首龍旗橫大舶。蜃窓蠣壁列層樓。當年星使曾呼渡。滿目蕭々蘆荻秋。壬未變。花房公使一行。逃於月尾島。蘆荻叢中僅有一漁舟。

漢城書所見

青萍曰似自劉禹錫石頭城詩。脫化者中。概有無窮感。

次洲曰先
叙地理一
寫風俗一
結一段妙
慨一段感
於一段不
墨動不筆
可思撥

十

東大西大門相對。南漢北漢山連山。峰巒三面列屏障。漢江一帶翻碧瀾。山川靈秀佳氣鬱。形勢彷彿古平安。壬辰八月日維吉。大駕巡幸出禁垣。日照刀矛蛇影動。紅紫間雜旌旗翻。親衛大將插羽箭。腰間大劍垂金環。其餘烏帽與紅帶。虎豹跳躍鳳凰蟠。寶背武官禽擊鼓傳警蹕。百官陪駕如雲屯。傾城士女盈巷陌。鹵簿絡繹塵埃紛。箕封文物因唐禮。知與我國同其源。峨冠博帶尙揖讓。禮儀三百何太繁。不識大權歸外戚。階上擬舞虞舜干。文弱誤國同一轍。山河幸美守成難。東方今日桑海變。海外猶有遺風

存。稽古何須閱舊史。俯仰今昔空長嘆。不獨城郭同形勝。千歲禮樂眼前看。

歸航船中作

來往四千里。經過百日間。黑貂裘已敝。碧海雁初還。獨酌朝鮮酒。笑看日本山。風濤不驚夢。歸思自閑々。

垂示佳什。諷誦一過。沈雄激楚。高壯蒼涼。目無全牛。胷吞雲夢。具此才力。足以自成一家。

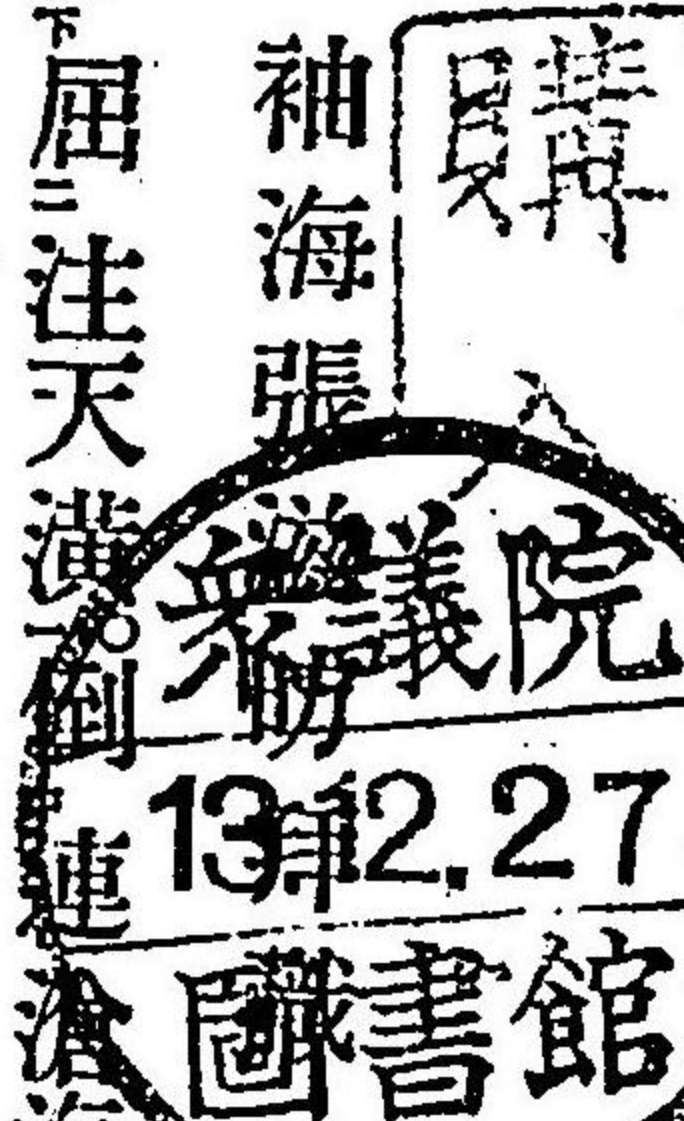
中華使者汪鳳藻誌佩

十一

鐵腸先生以北俄方肆潛窺東亞。安能漠視。抱澄清之志。作汗漫之游。周歷十旬。吟成一卷。吐忼慨於襟懷。擊楫應同越石。覽山川之形勢。聚米有類。伏波行間。作金鐵之鳴。言外挾風霜之氣。神綬小言。以志感佩。

光緒壬辰小春

袖海張



敖陶孫詩評曰。蘇東坡如屈注天漢。倒連滄海。變幻百端。終歸雄渾。大作殆此類矣。以詩名家者。且難臻此境。况餘事爲詩人乎。欽佩無既。

壬辰至日

辱交 衣洲叔山逸拜讀

丁數	北征錄正誤	訂正
一	二行 東西漫遊	東亞漫遊
四	二行 車に入り	車に上り
七	十一行 越くには	越くには
十	以下越くは赴の字に訂正す	
十	十一行 チヤンチルブラック	チヤンチルブラック
十	九行 人口五百二十五人	人口五千二百餘
十	十行 輸入する	輸出する
二	一行 着くをし唐鞋	着くし唐鞋を
二	一行 概ね壞圯す	概ね壞圯す
二	一行 戸街の	市街の
三	一行 入りて以て	入りしを以て
三	八行 なるかと	なるかを
四	七行 なるかと	なるかを

五十一	十二行	止るものなる
六十五	十一行	港内に子船
六十九	七行	龍尾山
八十	十一行	霧雨精神
九十四	六行	塘沽に
九十八	八行	人口五百二十一女
百〇九	十行	姑く在て
百十四	六行	下句あり
百十六	三行	弄すど
百二十四	六行	シガレ
百二十九	八行	過般壞圯
北遊草		
七八	八行	寒花
八	三行	伴蕭瑟

止るものゝある
港内に相子船
龍尾山
霧雨精神
塘沽に
人口五百廿一内女廿三人
姑くして
下句なり
弄する
シガレ
過半壞圯
寒花
伴蕭瑟

明治二十六年二月五日印刷
全二十六卷二月十日出版



著者 末廣重恭
發行所 青木恒三郎
印刷者 吉村武右衛門
發賣所 青木嵩山堂
全 青木嵩山堂
全 嵩山堂支店
全 嵩山堂支店
全 嵩山堂支店

東京府下東京市芝區翠平町三番地
東京市京橋區南傳馬町二丁目十四番地
大阪市東區上難波南之丁廿四番屋敷
東京市京橋區南傳馬町二丁目
大阪市中心齊橋筋安堂寺町
神戸市元町四丁目
勢州四日市港堅町

鐵腸居士 末廣重恭著

東亞之大勢

西洋綴 全壹冊
特別正價 金三十錢
郵稅 六錢

日本帝國ノ位置ヲ知ラント欲セバ我ト相對スル隣國ノ形勢ヲ究メサルヘカラス鐵腸居士
茲ニ見ル所アリ長風浪ヲ破ツテ西比利亞ニ赴キ夫レヨリ朝鮮諸港ヲ歴遊シテ北支那ニ出
テ轉シテ韓城ニ入り專ラ三國ノ形勢ヲ調査シ歸朝後更ニ許多ノ材料ヲ集メ屏居數月ノ後
チ此大著述アリ西比利亞大鐵道ノ景況ヨリ筆ヲ起シ海陸軍備露英ノ關係及ヒ露國ノ東
洋ニ於ル未來ノ勢力ヲ論シ我國ト政事上商業上ノ關係ヲ明カニシ進ンテ朝鮮ノ形勢ヲ論
破シ更ニ支那ノ日々發達スル有様ヲ舉ゲテ我國人ノ注意ヲ呼起シ考證精密議論確實ニシ
テ文章奔放雄大ナリ而シテ東亞ノ形勢ハ我國ノ一大問題トナリシ今日ニ於テハ商業ニ從
事セラル、諸氏モ政治ヲ談セラル、志士モ必ズ之ヲ一讀セザルベカラズ

鐵腸著書

政治小説 南海之激浪 全壹冊 正價金三拾錢 郵稅六錢
政治小説 雪中梅 第九版合本全壹冊 正價金三拾錢 郵稅六錢
政治小説 花間鶯 全壹冊 正價金四拾錢 郵稅六錢
政治小説 南洋之大波瀾 全壹冊 正價金四拾五錢 郵稅六錢
南洋大波瀾之拾遺 あらしなごり 全壹冊 正價金二拾錢 郵稅四錢
人情小説 闇夜鴉 全壹冊 正價金貳拾錢 郵稅四錢
偶意小説 玉手箱 全壹冊 正價金拾貳錢 郵稅二錢

諷刺小説 黃金之花 全壹冊 正價金拾四錢 郵稅四錢
前編一冊 正價拾貳錢 郵稅二錢
後編一冊 正價廿三錢 郵稅四錢
縮編一冊 正價廿三錢 郵稅四錢
鴻雪錄 全壹冊 正價金拾六錢 郵稅四錢
失策又失策 全壹冊 正價金八錢 郵稅二錢
何と云ふか政黨と云ふ 全壹冊 正價金四錢 郵稅二錢
帝國議會 一大要件 全壹冊 正價金四錢 郵稅二錢

朝鮮國辨理公使大石正己君著

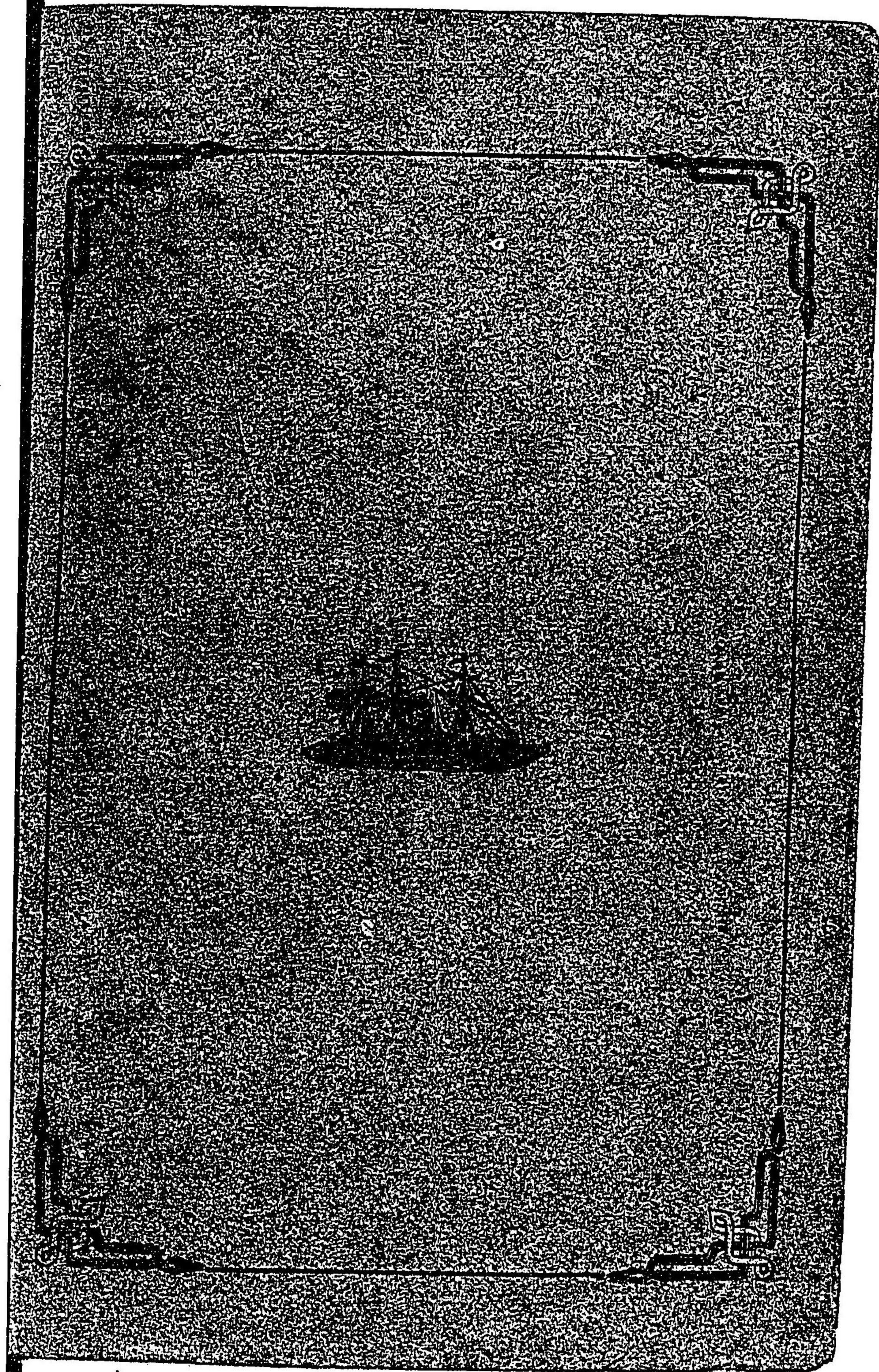
日本之二大政策

西洋綴美製本 全 壹 冊

特別 正價 金 三十 錢

郵 稅 四 錢

日清兩國ハ將來如何ナル地位ニ立ツベキカ、亞細亞ハ將來如何ナル運命ヲ有スベキカ、殊ニ三大國港ハ如何ニ開築セラルベキカ、三大鐵道ハ如何ニ聯絡セラルベキカ、四大航路ハ如何ニ擴張セラルベキカ、是レ日本ノ最大急務、本書ノ商策ハ之ヲ詳シテ以テ餘蔭ヲシ、近世外交ノ同好如何英雄豪傑ノ個人的祕密運動カ、國民的輿論運動カ、露國ガ既往將來ニ於ケル運動ハ如何歐洲同盟ハ起ラザルカ、亞細亞同盟ハ起ラザルカ、將來露國ハ如何君主專制ナラザルベキカ、立憲政体ナルベキカ、如何ニセバ世界萬世ノ平和ヲ確立スベキカ、如何ニセバ人類共同ノ幸福ヲ享受スベキカ、是レ亦東洋ニ國スルモノ、最大急務、而シテ本書ハ之ヲ考究シテ精緻ナリ著者ノ卓見、大略今必スシモ之ヲ言ハズ願クバ志士一讀ノ勞ヲ吝ム勿レ



31

7x

(M)

202597-000-1

31-7x

北征録 附, 北遊草

末広 重恭/著

M26

EDE-0155

